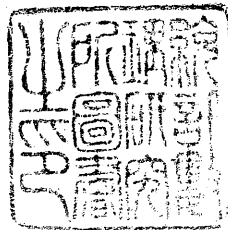


# 日本における統計学の発展

## 第 11 卷

雄 和 盛 青 手 し 話

壽 健 海 内 手 き 聞



1980年11月11日(火), 12日(水)

広島県社会福祉会館にて

## ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀨信邦\*、森博美\*、山元周行(\* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

青盛 「テーマありて 統計こなす 我がために 言葉引き出す 聞き手もありて (果十)」

あなたの手紙を骨格にして話を進めていったらよかろうと思うんですね。

内海 最初に先生の生い立ちのようなこととお聞きしていいですか。

青盛 その趣旨は、広高時代にどのような勉強をされたか、当時の広島雰囲気、昭和4年入学してからの京都大学経済学部の状態、それ最初にお話ししたらよかろうと思っています。

内海 ちょっと先生、その前に先生のお生まれになったのは。

青盛 明治41年の4月1日。

内海 こちらの方は3月30日になっていますね。

青盛 そこをお話しすれば一番よくわかるんですね。1908年4月1日の午前8時ぐらいに生まれたらしいですね。

内海 4月の方が正しいんですね。

青盛 それが正しい。ですが当時は4月1日生まれとして届けると、1年おくらせて学校へ行かにやならぬということがあった。そのために、私は父が43で母は38の晩年の5番目の子供であったから、早く学校へ行ってもいいわけ。そこで、兄が私と20違う。その間に姉が3人おる。5番目で次男、男の子だから、早く学校へ行ってもいいわけ。その願望をこめて3月30日として4月6日に届けを出した。

そのために、早生まれで1年早く学校へ行った。だけど、体も小さいし、駆け足もいつもビリ等になってあ

りまえ。

内海 先生、ご兄弟は何人おられますか。

青盛 五人兄弟。上に兄がおる。そしてその間の三人女だからね。20年間男の子がなかった。

だから、私が後に出生統計を説明するときには、4月生まれの人はなるべく3月31日まで届け出るのがあたりまえである。だから本当の統計というものはいかにとりにくいかということも、身をもって説明することにしておる。

その後、私より12歳若い女の人で3月26日生まれの人が、60になるころに、こういう話をした。そうしたら、その人は女の人であるために、3月26日を父親の好意で4月1日生まれに届けたわけ。そうすれば後にいけるからという意見で、そうしたわけ。ところが、明治41年から、その12年目の人が届け出て6年目の小学校というところになると、選挙の日と同じように、4月1日から行くんだから、4月1日の昔も早生まれとして早う学校へ行かせるのが当然であるということも、訴訟でも起こした人があったとみえて、4月1日生まれでも、早生まれに繰り上げることになった。

そのお父さんはびっくりして、「そんなことあるか」というので、校長にどなり込んだ。ところが「もうそういうふうになりました」というのでだめになったために、その子は学校へ行く制服もカバンもないままに小学校へ行った。これは、正直なその人の父親が、うそをついてだめになった話として、書いた人があるわけ。だから、そんなつまらぬこといいなさんな。遅う学校行かそういうのもお父さんの好意だし、早う行かそういうのもお父

さんの好意だから、ありがたいと思いなさいといーてあげたんだけど、そういう人には私の気分がわからぬ。「なぜ、要らぬことをいうのか」といって不思議がられたことがある。

それから、私より7年ほど上の人で、4月1日生まれで、これは津山の片山満知という人ですが、小学校へ早生まれで行く人があるわけ。だから、親が多少家柄とか勢力があると、その人のためには早う小学校行かせる。貧しい家であつたら、あの人は遅う行つたらよろしいということになるんだけど、結局は、日付の取り扱いがその間に变化したということがわかる。

内海 先生のお父様はどんなお仕事をしておられたんですか。

青盛 うちの父は元治元年の2月生まれで、若いときは、たばこを行商したり、商売もしておつたらしいですが、昔でいうと高等小学校出ただけでやっとなつた。そして、呉市の発達とともに、土地や借家を建てて、そして借家の収入で十分生活してきておつた。

その私の父方の伯父が、青盛喜一郎といいまして、大正9年までの十何年間、呉の市会議員をやつた有力な人であつたわけよ。そして、大正9年の国勢調査のときに、国勢調査の回顧録の中に出ておる人で、国勢調査の調査員が来たのに対して「よくいらっしゃいました」と、礼服、紋付羽織はかまで、調査書を三宝の上に載せて調査員に出したので、非常に感激されたという逸話が、大正9年の「国勢調査回顧録」に載っておるわけよ。

そして、もう1人兄がおるわけです。

内海 お父さんのお兄さんですか。

青盛 喜一郎の兄。跡取りだったんだけど、明治10年ごろにほうそうという、天然痘を病んで、熱が高いために顔にジャギができたりして、熱のためにとにかく普通の意識でなくなった。しかし仏法においてはありがたい人であったわけ。

私のいいたいのは、その人も、豊太郎、そして私の父も常太郎、その間におばさんが2人おられたわけ。

それが、なぜ皆「太郎」になっておるかということをちょっとお話ししたらいいと思うんです。その豊太郎という人も私の父も、皆、当時の徴兵検査の世になって徴兵にとられるおそれが多分にあった。しかし、家の相続人であるという条件がつけば、徴兵を明治8年に嗣子で、明治18年には父が養嗣子のゆえに免れることができた。ですが、それが天然痘でいわゆる廃嫡になったために、本家の喜一郎という人が相続人になったわけよね。そして、その人はちょっと背が低いし非常に賢かったために、「今太郎」といわれたような人であったけれども、背が低いために徴兵は免れたわけよ。

内海 天然痘は治ったわけですね。

青盛 最初の豊太郎伯父さんは治ったけどジャギが残って、頭が通常でなかった。しかしお寺参りはよくできたし、いまごろでいうと妙好人いう人であった。

そんなことはいいけれども、話は明治35年の国勢調査の立法が国会でできたというときにとぶわけよ。明治35年の国勢調査法が成立した理由は、当時吳を含む第2区の内藤守三という西条出身の代議士がおったわけ。その代議士が議員立法として国勢調査の提案者になった。そして、議会側り説明者として吳文聡さんが説明に立った。

それが呉市をむすぶ因縁である。それで無事に国勢調査が通った。

国勢調査というものは、1900年のアメリカセンサスと、政府代表として呉文聡さんが外国へ行って調べてきた。だから、国勢調査をやる必要があるということも、呉文聡さんが説明した。そして議会で説明したときに、「国勢調査をするのにはどれだけの費用が要るか」といったら、「これだけ費用が要る」といった。「そんな安いものなら大いにやろう」、「ただし、金を使わねばろくな調査はできませんよ」ということを、呉文聡さんが語っておる。

当時の統計としては、三越の百貨店とか、そういう人が広告に書くことは金をもらって書くことだから、本当の統計じゃない、うそが載つとる、だから相当費用出さなきゃいけませんよというから、「たくさん費用が要るのか」といったら、「そんなには要らぬ」、「なら、やろう」ということになった。

なぜ議員立法になったかということ、日清戦争の後、財政不如意で、これから日露戦争に備えてしっかりやらなきゃならぬときには金が出しにくいから、政府からセンサスやりますということをお願いしたわけよ。だけど議員立法でやってくれるんならやろうかという重い体制をとっていたということが、呉文聡さんの伝記からわかる。

本家の伯父あたりもその事実を知っておるから、大正9年の国勢調査のときに、明治先帝のときにできた国勢調査をいま受けるのは、まことに光栄ですということをあいさつして、三宝で丁寧に渡した。これを、5〜6年前の全国統計大会のときに、後藤正夫さんという大分県知事としておる人が、話をされた。ぼくは、そのときに

行かなかったけれども、その記録読んでみてびっくりしたことは、青盛喜一郎という人も調査員も、共に紋付や礼服で出たというふうに報告されておりますが、これは違います。大正9年の国勢調査のときは、もう私も知つてゐるけれども、うちの兄貴が調査員になって、おそらく銀行員として洋服なり和服でも、そういう服装で行ったわけ。だから、本家の伯父さんという人がそういう礼儀正しい人だったから、自分として紋付を着ておっただけで、ほかの人にそうしたわけではないということがいえる。

当時私たち小学生は和服で通学して、よほどの特別の式でもないし、ハカマはつけなかった。紋付草を摘み取って、それを背中につけ、ふだんに紋付もったいないとはやして遊んだ。そのときは、兄が調査員になつてから。

内海 お兄さんは、銀行に行っておられたんですか。

青盛 ええ、呉銀行に出とった。

内海 お父さんは、このころは呉にお住みでしたか。

青盛 ええ、呉に皆一緒に大家族として住んでおった。

内海 先生がお生まれになつたのは……？

青盛 呉の元町という中心地ですわね。その関係で呉さんの伝記を読み、それから国勢調査との関係においては、財部先生と一緒に、島根県の方の統計講習会で講師として講義をし、島根県の宿で歓談してきておる。

これが後に、呉文炳氏が「江戸の文化史」というふうな意味で、経済史の論文として、京都大学で財部さんによって経済学博士を授けられるという因縁になった。呉文炳氏がなぜ東京で博士号を取らずに京都で博士号を取



られたかという因縁にもなるわけよ。

内海 吳文聡さんというのも吳のご出身ですね。

青盛 その分は広島県の統計史に書いておるが、青山の  
 隠田で生まれられ、吳市の出身ではなかったわけ。だから  
 それに話飛んでよければ、西暦1967年の10月か、この  
 ときに広島県で第18回全国統計大会が開かれた。その  
 ときに、私が指導して、中国地方の統計先覚者を顕彰する  
 という意味で、何人か挙げたわけよ。島根県としては、  
 西周と森鷗外が先覚者でおる、岡山県としては、箕作秋  
 坪、津田真道と箕作麟祥と、それから花房直三郎という  
 統計局長、それから生命表や何かの矢野恒太の夫人、広  
 島県夫人という形で、広島県は一番古い順から世良太一、  
 吳文聡、それから国勢調査を通した内藤守三、横山雅男、  
 京都大学の教授をしておった戸田海市という人がおられ  
 る。これが財部さんが洋行しておるときに、統計の講義  
 をしておられた人ですね。この人がアメリカ移民につい  
 ての論文を書いたということの手紙を、私が「名古屋市  
 史」を調べておるときに調査員の人からもらって、それ  
 で移民に対する見解がどうであったか、当時の経済学部  
 の先生として時事問題というものが語れる唯一の人であ  
 って、偉い人だということだね。この当時、初めて写真  
 を載せてそういう話をしたわけ。内藤守三の息子の内藤  
 誠意という人が、私の中学校の校医であった。内藤誠意  
 の奥さんが、これを顕彰した当時訪ねてみえたこともあるし、  
 とにかくこのことは「広島県の統計史20年」とい  
 う部分に、付録としてはっきり書いてあるわけです。

内海 それは先生がお書きになったんですか。

青盛 ええ、その書いてある中に吳文聡さんの伝記や何

かについても詳しく述べてあります。あの人は、東京の青山隠田で生まれられたんだけれども、生まれたときには、お父さんが山田という漢方医のところへ養子に行っておられた。その養子娘が亡くなって、だから跡入りに津山の箕作家の出戻りの長女をもらわれたわけ。山田黄石と箕作家の娘との結婚に際して、もとの姓で結婚するよりは新しい姓を名乗りたいという意味で、浅野藩の許可も得て、呉港の出身であるという理由をもって呉黄石と名乗るということと、幼名を穎士といった呉文聡さんが生まれたのがほとんど同時でしたというようなことが書かれておる。そういう理由づけをしなければ、なぜ呉市に呉文聡の記念碑ができねばならぬかということとは、説明つかなかったわけよ。それが呉文聡さんの記念碑ができるといういわれにつながるわけです。

私は、こういう古くさいことの詮索は余り好きではない。だけどこういうことを語るようになったのは、私も年寄りになった証拠かもしれぬ。(笑)

ちよっといっておきたいことは、私の本家の伯父が家柄とか、そういうものに対して、古い詮索をすることを避けて、私の家の祖先は「取り子、取り嫁」ですから、そういう家柄と関係ありませんという宣言をしたわけよ。そうすることにおいて、呉市の財界、呉銀行の頭取になるとか、後で出てくる市長としての松本勝太郎とか水野甚次郎とかいうふうには、政治的なことに熱中することを避けるようになったのは、明治35年から大正9年まで市会議員もやっと思った人が、60ぐらいになったから政界から足を洗う、そのことのために、うちはその家柄じゃないということをしたわけよ。それで、その子供

や何かが自力でやっていくというようになったのではなかろうかと、私は思うわけ。そのことは、後で財部先生のことを述べるときにもいいたいんだけど、その方に話を移しますか。

内海 先生のお父さんの方はこのくらいにしまして、お母さんの方はどうなんでしょうか。

青盛 母の方はいま広島市になっておるけれども、安芸中野村の出身で、18ぐらいのときに父のところへ嫁いできた。初めのころは父の方が養子になるかのごとく、どちらの方へ入り込んだったけれども、後には独立した。そして私が玄高を終った昭和4年の9月に、59歳で亡くなった。

内海 お母さんの方の家では、お母さんの方のお父さんはどんな仕事をしておられたわけですか。

青盛 それは造り酒屋で、乗来政之助といって、村で有名でもあるし、浄土真宗のところだから信仰にも厚い人であった。

どうも、家柄とかいうことをいうと、担ぐ方の側としては非常にいいけれども、担がれてみこしにのせられとる間にドスンと落とされたときに惨めな思いをする。また、そんな系図のことをいうのは、実は吳文聡さんが、「子孫のために」というので祖先の系図のことを語っておられて、そして最後の方で言い置くこととして「親より大きいりっぱな墓をつくってはいけない」とか、「葬式は簡素にすること」とかいうことが、吳文聡さんの本の中に残っておる。それから吳文聡さんの生活の仕方というものが、その言葉の中にあらわれておるから、吳文聡さんの統計学に関する訳本とか書物以外に、あの人の生

治の仕方というものがはっきり出ているね。

ことに名刺や何かについても、吳文聡さんが人に名刺を出しても、人がひとつも注目してくれない、しかし吳文聡さんが実力をつけて行くと、向こうの方から「ああ、吳文聡さんですか」といってくれるようになったということが出ている。

もう一つ、そういうことをいうのは京都大学時代に戻らにゃいけないけれども、ついでにといいますと、昭和7年に卒業して大学院に入ったときに、7人一緒だった。

そして、だんだん日本統計学会にいったかという話をしますと、昭和13年の4月3日に、財部 汐見兩教授の紹介で、京都大学助手として、田杉競という人と一緒に入っている。それから、林癸末夫、久保田明光、武田長太郎、そういうふうに当時としては余り統計専門の人でない人も、皆協力して統計学会に入っておられたということがわかる。

だから当時の統計学会というものは、統計学やる人にプラスするに経済学部の教授連中が皆応援の形で入っておられた。したがって弟子も、統計学専門以外の人も入った。ことに、紹介が、汐見三郎という財政学の人と財部さんとの両方の推薦という形になる。私は、昭和7年に大学院に入って、昭和9年の12月19日に結婚したわけよ。

最初の論文の「海外移住民考」は、昭和10年の7月に出ている。続いて11年の1〜3月の「浪華の鏡」というのに「移住と大阪府人口」、それから11年が「来住と大阪市人口構成」、12年に「晝間移動人口論」「移住統計方法」というふうになってきている。

内海 昭和12年に3つ書かれたわけですね。

青盛 12年には3つ書いておる。昭和12年というのは支那事変が起こっておるから、「支那事變と人口問題」というのを大阪府の雑誌に書いた。それから第1回人口問題全国協議会という、学会でもない、いまからいえばわけわからぬけど、上田貞次郎氏が主宰した人口問題協議会というものがあつた。これにも加わったりして、そして前後して、東京大学の助教授だった猪間驥一さんがおる「都市問題」という雑誌に、「都市人口増加の意味」というのを書いた。これは猪間さんとの統計学会におけるつき合いというものから、こういうふうになつてきた。

いまいいかけたことは、なぜ、そういう統計学者の伝記に興味を持ったか、関心を寄せたかということ、その当時、大学に残った連中と一緒に統計の研究会を持とうということになって、最初に取り上げたのが杉亨二の孫の、杉栄の「蜷川統計学と有澤統計学との批判」という論文が出たので、その読書会を開いた。

内海 そのとき、この杉栄という人は、どこにいたんですか。

青盛 杉栄という人は杉亨二の孫であるという理由から、立命館を経営しとった西園寺公のお付きの偉い人で、中川小十郎という学長か理事長しとった人のお声がかかりで立命館の助教授に雇われてきておつた。有望な人であつて、大いにやろうとしとつたが、間もなく支那事変に応召して死んでしまった。死んでしまったわけだけれども、その前はそういう人が立命館の教授になれたのに、わしはなぜなれぬのかということにもなる。

内海 その方の「理論統計学」とかいう本が残つていま

すね。

青盛 あります。

内海 支那事変で死んだんですか。

青盛 死んだわけよ。でも、別に当時としては対抗馬がなくなったから、いい気味だとは思わなかった。それどころじゃないわね。

現に、私は年にとって自慢にいうと、京都大学の卒業式  
のときに、卒業生代表として答辞を読んだ。なぜかとい  
うと、当時7学部あって、各学部が交代で卒業生総代で  
答辞を読むことになっていた。たまたまその年が当たっ  
たのと、私は三高時代から、当時の学校制度としてはア  
イウエオ順でもABC順でも、青盛はトップになるから、  
それで成績がよいわけじゃなかったけれども、何でも私  
が総代になってやりよったくせがついたために、京都大  
学に入っても、三高の代表兼経済学部の代表になって、  
同好会を切り回す、といっちゃおかしいけれども、大阪  
へ見学に行ったり、奈良で同窓会大会をやったりしたと  
きに、司会したりした。いつも口の悪い蜷川虎三さんも、  
私が奈良の大会のときにりっぱな司会やったもんだから、  
そのときだけ私をほめてくれた。(笑)

逆に振り返っていうと、なぜ経済学部選んだかという  
ことになるわね。それは、法学部選ぶのなら東大だし、  
文学部へ行くのは余り好かぬし、そうしたら中間の経済  
学部以外にない。そして、やっとなる間に、当時はドイツ  
語の経済学と、英語、フランス語というふうに分かれて  
おった。したがって、研究にいいこともあるし、もう一  
つはゼミに3つあったわけ。1つのゼミは神戸正雄先生  
の財政学のゼミ。そのときに、「専売か、たばこ消費税か」

というドイツ語の原書があるわけ。現にいまも家にあるけれどもね。それは、「専売がいいか、たばこ消費税かけるのがよろしいか」という意味で、たばこ及び酒の税金が5〜6割であるということ、当時の値段でどれだけかということとを克明に調べてゼミに報告した。

その当時の話として、青盛君のようにたばこをのまぬやつがなぜたばこのことがわかるかという批評があった。それならばのんでやろうという気にはならなかったけれどもね。(笑)

内海　ずっとたばこは初めからお吸いにならなかったわけですね。

青盛　それから35までたばこはのまなかった。35になって戦争がたけなわになって、たばこが配給になったころに、自分はたばこをのますに、京都におったから上賀茂の百姓のところへ持って行きますと、スグキを安く分けてくれた。それから春は、深草におりましたから、タケノコ山へ行ってタケノコを分けてもらうのにたばこをあげると、幾分タケノコやスグキがたくさんもらえる。だんだん「あいつはのまぬたばこをくれるんじゃない」というので、ひとつもありがた味がない。(笑) ありがた味がなくなっても構わぬから、慇懃にしようと思ったんだけど、その間に家族を疎開させて、私単独で京都に残っておった。

内海　ご家族の方は広島に-----。

青盛　広島福山の奥の方へ疎開した。そうしたらさびしいし、それから京都の親しい人が「たばこぐらいのみゃいい」って教えてくれたので、病みつきになったけど、大してのまなかった。だけどふかしたつもりでもの

み始めて、35から62〜63までのんだわけよ。それで、その間、たばこの税金が上がったり、いろいろなことでやめようと思っててもやめられない。とうとう35から25年間ぐらいいのんだ。

内海 いまは、もうおのみにならないんですね。

青盛 ええ。やめるときが傑作よ。

私は35までのまなくて、あと25年間のんだから、35と25年を引くとまだのまないとさが10年あると思っただけだ。よく考えてみると、20歳までのまぬのは当たり前だ。だから15年間のまずに25年間のんだんでは、差し引きおまえの肺は真っ黒けじゃいわれる。それじゃ済まぬから、あと10年やめましようということになった。しかし、やめる私は賢くて、やめない私はばかじゃということになりますと、位相の差で苦しむわけよ。やめてもやめぬでもいいんだ。しかしあと10年はやめたらよろしかろうというふうに、この間、真空というか、位相の差をなくしたらすつとやめられた。私は、ときどきこういう手段をとるわけ。

私には、これだけの論文があるけれども、空というか無というか論文の中に、やっぱり余り差をつけぬことがいいことじゃと思うね。

内海 そのころ先生のゼミナールは、神戸正雄先生の財政学と……。

青盛 それと、その次には八木芳之助という農業経済学の先生について、農業経済のゼミナールに入って、「農地の価格と農地の収穫高との相関関係」という報告を出した。農地価格と農地の反当たり収穫高との相関関係、それが統計の相関関係への入門ということになる。



それと同時に、蜷川虎三のゼミにも入ったわけ。そのときには、特定の報告はしなかったけれども、当時デイビスの「経済統計」の訳本を出しておった関係上、同じときのゼミの人が、琵琶湖のフランクトンと琵琶湖の水産の関係みたいな論文を書いて、一緒に大学院に残ったのがおったことも思い出す。

当時のゼミというものは、2年及び3年において1年間入りさえすればよろしいので、いまのように必須とか何とかではなかった。それから、論文もあるけれども、いわゆる卒業論文というふうな外形的な形式はとらなかつたから、すこぶる自由だった。それが大学院時代の問題。

それと、人口問題研究所と、それから都市問題の関係で、猪間驥一さんという人を知った。

人口問題研究の猪間さんという人は東京市政調査会におられた。この方は、わしらの学長であった森戸辰男の後、統計の助教授として東大の経済学部において、それから統計グラフの専門家として出た人で、市政問題調査会におられたので、こういう会に関係しておった。

それからここまででいっておきたいことは、こうやって統計学会に入れたから、次々に報告を出したけれども、それ以前の段階においては、「広島県を中心とする海外移住民考」を書いたけれども、移住都道府県別の移動がどうなっておるか、大阪市を中心として扱う立場において、「浪華の鏡」という地方の統計雑誌に寄稿した。ですが当時の寄稿というものは、寄稿すると、高島屋百貨店のくつ下をくれるぐらいのもので、大して収入にはならせぬわね。収入の点からいえば、「海外移住民考」を書いた

ときに、1ページ2冊の原稿料であった。

内海 京都大学ですね。

青盛 ええ、「経済論叢」。20枚ぐらい書くつもりでおったところが、八木芳之助という人が編集委員長であって、「そんな若造が、入りたて早々にそんなに20枚も大論文書くな」といっておこられたわけよ。「そうですか」というので、やけくそにならぬでもよかったけれども、なるべく簡単にしてやろうと思って、どういう因果関係かというので、何節か文章を短く縮めたわけよ。そのために、悠々と議論していくという論法ができなくなって、なるべく手短かに議論しようというくせがいった。

それだから、ゆっくり移住における広島県の地位とか、全国におけるというようなことになってくると、いろいろと書くところは必要だからと思って、「浪華の鏡」を利用して書き始めた。そうしたところが、私の統計の先輩として菊田太郎という経済地理の有名な人が、黒正巖関係で、こういう先生たちも岡崎文規にしても皆財部先生の弟子になるわけ。その菊田太郎氏があるとき私に注意していわく、「あなたが大阪府の統計雑誌に書いておる気持ちは純粋であって、原稿料かせぎでないということとはわかる。しかし、ああいう雑誌とかジャーナリズムに書くと、人間が売文めいてきて卑しくなるから、たとえただであって、ああいう原稿書くな」といわれたわけ。

「ああ、いい注意じゃのう」と思ったから、積極的に書いたわけではなかった。

内海 最初の「海外移住民考」というのは、結局原稿用紙で何枚お書きになったんですか。

青盛 原稿用紙の分はよく覚えておらぬけれども。

内海 印刷して何枚ですか。

青盛 上段と下段、詰めて書いて12ページでしたね。

内海 1ページ2円というのは、印刷したものが……？

青盛 印刷したのが1ページ2円だった。大学を出てから無給副手という時代もあった。だけど、大学出て3年目に結婚して、そしてようよう5年目に助手になったわけね。

内海 最初助手になって、それから副手……？

青盛 先ほどいった昭和9年の12月19日に結婚した年だったか、それに前後して、どう思うてもかっこうがつかんわね。だから先生にお願いして「無給でもいいですから副手ぐらいにしてください」といったので、副手であっても、ひとつも収入はないわね。だから、2円でも収入があったら喜ぶわけ。

内海 先生、副手の間はどういうふうにして生活を支えておられたんですか。

青盛 その分は、うちのおやじが土地を経営しておるから、家賃のうちから50円なり100円なり、ずっと払ってくれるわね。

内海 そのころは月に50円や100円で生活できましたか。

青盛 そりゃできとったけれども、助手になったら75円だったかな。

内海 助手になれば、お金をくれるんですね。

青盛 75円。だけど半年して助手をやめて、もとの副手に戻ったときは55円かな。これは毎年1年ずつ、こうやって更新するわけだけれどもね。助手やつとった者が無給じゃ困るからというので、55円というのがずっと続いたわけ。

内海 その、一度助手をやっておられて、それからまた副手になられたというのはどういうわけですか。

青盛 結局京都大学の経済学部には助手の席が少なかった。だから、助手が済んだやっは適当に他校の講師に入れても、その講師の席がほとんどなかったから、彦根高商なりああいふところへ売らにゃいけぬわけ。だから昭和12年にわしを助手にしてくれたということは、財部先生が唯一のわしに対する恩恵というか、愛であったわけよ。

内海 なかなか助手にでもなれなかったわけですね。

青盛 それはなれなかった。だけど、いつまでもそういう助手や副手にしておるのはかわいそうだからと思って、彦根高商の教授しておる岡崎文規さんと話をする機会があったときに、岡崎さんが釣りが好きだから、彼が釣りの話を財部さんにしておられるのを聞いて、私がつい「琵琶湖にも潮時がありますか」みたいなことを聞いたり、それからサクラダイとムギワラダイとの区別を論じたことがある。サクラダイといって、桜の咲くころのタイはおいしいけれども、ムギワラダイという、麦が笑って麦わらができるころのタイは、味が落ちてまずいということをいったわけよ。このことで、岡崎文規さんがごきげんを損じたということが1つある。(笑)

もう1つは、昭和13年ぐらいか、助手をやめてかわいそうだから、ぼっぼっ、黒正巖さんが大阪経済大学の学長しとるから、そこへ行かしてやってもいいという意味で、黒正さんのところへ訪ねていけばいいといわれたから、訪ねていった。

そうしたところが黒正巖という人はなかなかよくでき

るりっぱな人だけれども、黒正家の養子になっていって、経済地理を講義しとられたわけよ。そして、その講義の席上どういふことをいわれたかという、好きな人ができたら思い切って結婚したらいいんだ、遠慮するというのはダメだ、わしのように遠慮しておると——洋行中に遠慮しておったところが、わしより2年ほど前の京都大学の同好会の委員長にその奥さんをとられてしまった。だから思うときにはさっさと結婚してしまいうんだなということをおわられたというのが有名な話です。

内海 ああ養子へ行ったんですか。

青盛 ええ、それで、その人がほかの人と結婚したために、養子の娘が不届きなことをしたから、それを除籍しただけで黒正さんは家へ残った。だから、今度は祇園の若照か、そういう人を嫁さんにされたわけ。その間に生まれたのが2卵性双胎児というか、男の子2人だった。

その当時、出生男女別の性別を問題にしてみたから、つい思うことは出るわね。「先生のところは1卵性双生児じゃなくて……」というようなことをいったために、「また要らぬことをいう」とおこられたわけよ。それで、またその先生になることも消えて流れてしもうたわけ。

そのうちに戦争も激しくなるし、黒正さんのおられた山科の屋敷のところに琵琶湖の疎水が流れてきておる。それがずっと、伏見の深草の方へ流れてくる。つまり、私のおるところへ流れてくる。だから帰って、私が家内にいうことに、財部先生の最初の弟子は山科でりっぱな屋敷に住んでおられるけれども、末っ子弟子の私は疎水のほとりで、始めの流れとしまいの流れとではこうまで違うものかといって話したことがあるんだ。

内海 財部先生は、どこに住んでおったんですか。

青盛 財部さんは吉田山の向こうの真如堂のそばに住んでおられて、その家にかりんの実があった。それをもらうて帰ったことがある。だから、かりんの実を思うたびに、財部先生のいがぐり頭を思い出す。

内海 私は黒正巖というのは、マックス・ウェーバーの翻訳で知っていたんですけどもね。そういうことがあったんですか。知らなかった。

青盛 だけど、黒正さんという人はりっぱな人で、やっぱり家に財産もあったけれども、黒正さんの肝いりで経済史研究所というものの設立をし、京都大学における本庄栄治郎さんを初めとする経済史グループの、一つの旗頭でもあったわけよ。

財部先生の死後、私は高田保馬さんと中川興之助という財政の先生、この二人の世話になったりして、大学院にもう一遍入ってみたり、経済史研究所を手伝ってみたりしたし、その因縁で「名古屋市史」第1巻の「人口及び地域」というところを書くということになった。そのときは、本庄さんの関係で、経済史研究所へちょっと籍を置いて、研究所の方へも論文書いたり、文献紹介書いたりしたのがその当時の思い出です。

内海 先生は広高のころには、そういう統計とか人口については何か……。

青盛 いや、全然そういうことはない。

内海 先生は文甲でなく、文乙へお入りになったのは、どういう理由ですか。

青盛 それは高等学校の入学試験のときに、大正14年と

15年の2回だけ2つの高等学校を受験できた。私の場合は、広高と岡山六高とを併願した。どちらか1志望、2志望というわけ。私が明治41年生まれであるということから、日露戦争の戦後で、生まれる人口がちょっとふえた。けれども、後で述べるように、戦後の「ベビー・ブーム」というふうな悪口はいわれなかった。しかし、私の父親が、「和雄」という名前をつけてくれたのを、ある意味では感謝しとるわけよ。

内海 平和という意味なんですか。

青盛 いや、そういう意味じゃないわ。昭和以前じゃから。和と雄との矛盾の統一だね。そうだけれども、父からすれば、私の上の姉がロシアの露をとって「露子」という名前になっている。その戦争も済んだわけよ。それと、ある意味では戦争をどうやって免れるかというふうになっとなったわけよね。だから、あるところへ養子に行くなり、長男であるという——3番目で長男ではないけれども、初めいったように、兄弟3人、喜一郎とか豊太郎とか常太郎とか、みんな太郎がついておるのは、別に長男だから行かぬで済むというわけじゃないけれども、嫡子であれば行かぬで済んだわけだ。結局、西南戦争とかいろいろなことで、もっと後になると日清、日露戦争にも引かれないように、ある意味では、そう好戦的な人間じゃなかったわけだ。

内海 お父さんは戦争には行かれたことないですね。

青盛 ないね。(明治18年の徴兵猶予だったから。)

内海 西南戦争にね。

青盛 ええ。(笑) それと同様に、本家の男の兄弟、わしの兄弟も結局……。だけど、最後にひっかかったのが私

だった。昭和19年の5月15日に呉海軍へ-----。

内海 海軍へ行かれたんですか。

青盛 わしら丙種だったけれども、丙種でも合格じゃから、甲種や乙種は皆陸軍がとってしもうて、昭和19年の6月段階には、もう丙種の私らぐらいしか徴集できなかった。それで呉の海軍へ二等兵で入った。自分は無事に入って、それから空襲があるからというので地下室へ入れられて1夜を過ごしたわけよ。

そうしたら翌日になって、もう一度検査してやるからといって、呼び出しがあった。そして呼び出して血沈とってみたら、血沈がちょっと早うなっているといって、「おまえは御奉公に及ばず」で、2日目に帰されたわけよ。

それには理由がある。その当時、呉の海軍の司令長官をしておった野村直邦という人、終戦の前には海軍大臣にもなった人ですが、その人の奥さんが、わしの本家の次女、いとこだった。だから、わしが一兵卒で入ると、野村長官の奥さんのいとこをぶん殴ることになるわけ。それは殴ってもいいんじゃないけど、これが死んだら兄貴には子供がないし、おやじは困るからと思って、本家のおじにいて、本家のおじも「そうじゃのう」いったけれども、どうにもならぬわね。そのうちだれか気をきかせて、野村さんのいとこが入つとるのをぶん殴ってもいけぬからというので、2日間で帰されたわけよ。

内海 それはよかったですね。

青盛 さあ、どうかね。

内海 呉も空襲がたびたびありましたけれども、そこにおれば危ないですね。



先生は呉で生まれて中学校も呉ですか。

青盛 ええ。

小学校早生まれで行って、6年生のときに呉の中学校受けたわけよ。そうしたら当時100人であって、ちょっと上がったんだらうね、100名の中から外れたわけよ。それで、やむを得ず高等小学校に1年行って、次の年には100名の定員が150名になったので悠々とパスして、自来10番か20番の間におった。

そうしたら、4年のときから高等学校へ入ったらよさそうなものだというので、両方受けたけれども失敗して、大正15年に高へ入った。だから、小学校で1年、高等学校で、これは落第じゃないけれども5年から入るとるから1年、2年おくれとるわけよ。2年おくれとるから、どっちかといえは年上のようになっているはずだけれども、小学生のときから年が弱いというひけ目を感じておりますから、いまだにほかの人に対してこわいわというような顔をするのね。だから、これが私が幾分若くて生き続ける理由だらうと思うんです。

ただ結婚のときに、私の家内は、3歳半違うんだけれど、やっぱりちょっと姉さんのような感じがしたわけよ。妹のようなやさしい人もらいたいと思っていたので、姉さんのような気がしてどうしようかなと思った。

見合い結婚だったけれども、最初の見合いで脱落しちゃおかしいし、どうしようかと思ったけれども、これから何回見合いして選択しても、また同じ人にたどりつくんじゃないだろうかと思ったから、1発で結婚した。そのかわり、家内は4〜5回見合いしておるらしいけれどもね。

その二とは結局、後に述べる結婚統計なり離婚統計の批判にもなるけれども、いまごろの人は、結婚を見合いと恋愛の両方に分かつて、結婚したときに見合い結婚であったという、離婚のときはまた聞くわけよ。「あんた見合いですか、恋愛ですか」。だから、見合いの方が大部分の場合には、見合いが悪いから離婚したんじゃないという理由づけになる。それが、見合いをしながら恋愛し、恋愛をしながら見合いの形式をとる、これは自由なわけでしょう。区別はない、全体のパーセンテージを分けるんだからね。どちらがいい悪いということないわけよね。

こういうことは、先ほどの話に戻るけど、財部先生が試験問題を出すときに、私の前のときには必ず「男と女が道行きをする統計をもって、その恋愛関係を断定できるでしょうか」という試験問題が出ることに決まっていた。だから、男と女が連れて歩いたって、恋愛関係がある場合もない場合もある。親子で連れ添っている場合もいろいろあるから、一概にはいえませんよという答えでなければいけない。

そういう答えを書こうと思って試験を受けたところが私のときの問題は文語体だけれども、「天才と凡人とは、人口統計調査の上で、どのように取り扱われていますか、お伺いいたします」という問題が出た。

内海 これ1問だけですか。

青盛 そういうこと。凡人というものが平均人であるか、天才というものは偏差を逸脱したものであるかということよ。それで何か書いたら、たしか優をもらった。それが病みつきになった。

具体的には、蜷川虎三が外国から戻って、バリバリヤ

つとるので、その魅力に引かれて、大学院に入るときに、経済統計学という題目で入った。そうしたら、当然のように、財部教授と蛭川亮三を大学院の指導教授に命ず"となったわけよ。あっちの顔を見、こっちの顔を見て財部さんと蛭川亮三との両方を加えて2で割った平均的な勉強をしなければならぬ。そうしたときに、蛭川さんが、ある意味では愛情を持って「わしを世話せんでいい、財部さんのところへ行け」とか、「財部さんの世話をしろ」というふうにいわれた。蛭川亮三の世話をする人は前田勇太郎という人が専門にしまったわけよ。その人も同様に、支那事変で戦死した。まあそういうような意味で、経済統計学をやるか、財政学の地方財政論をやるかということであったわけ。

当時としては、財政学と統計学とは、経済学部の原因とを中心とする大柱であった。それが現実においては、統計学も財政学もほとんど経済学部の中の支柱というか、中心の科目でないように扱われてきておるということが問題なわけよ。

それから、大学院時代になってくると、先ほどいった菊田太郎や三谷道麿といって、これは財政の人なんだけれども、「人口動態平行論」を書いたりして、人口統計に非常に関心のある人であって、先輩としてうまく指導してもらったし、澤崎堅造という人が東京市の統計課において、後で京都の大学院に入ってきて一緒に研究をした。そのときに、彼はクリスチャンであると同時に、研究者として一緒に私も行きだして読んだのが、ジューズミルヒの「人口変動にあらわれている神の秩序」という著書であって、そして、「バイブルにおける人口の変動の秩序」。

人口統計にとって一番重要なことは、出生というものがあって、それから移住があって、いろんなことをして最後が死亡に終わるわけよ。ただ、「死亡率が出生率を決定する」というような「人口動態平行法則」ということをいった三谷道麿や、いろんなことが思い出されてくる。

それで、澤崎さんとの関係において私がいったことは、バイブルの中に盛んに比喻が出てくるわけよ。比喻というものは論理のごまかしということをして私がいったことがある。比喻がなければ、やっぱり本当のことがあらわせないなどという意見も持った。そういうことで、別に共同研究はしなかったけれども、毎日のように研究室で会ったりしていた。

内海 そのころは1つの研究室に2人ぐらいおられたんですか。

青盛 いや、5人おっても10人おっても皆突っ込みの大部屋で、一緒に来ったわけよ。そうだけれども、多くはいろいろアルバイトといたしますか。それぞれの大学で助手をしておったわけね。そのうちどんどん散っていきましたがね。散っていかねでも結局戦争のために応召して、みんなつぶされてしまったわけね。生き残りという人は余りおらぬような状態であった。

内海 そう、この澤崎さんも支那へ行っただけ。満州ですか。

青盛 満州から熱河の方へ行っただけ。教会関係の仕事をしておった。ところが、中共が攻めてきたかして、教会を離れてこっちへ戻ってきた。そうしたところが引き返してまで行って本か何かを探しに行ったら、殺されてしまった。奥さんが嘆いておられたけれどもね。

それと同じように、富士川遊という、日本の医学史を書いた人の長男も、満州のどこだかにおられて、結局ソ連にひかれて死なれたかね。この弟の英郎という者が、わしと同期で、先日会いましたがね。兄さんの場合は、何かその人の奥さんがいっておられたけれども、あっち向けといえど何年でもあっち向いておるような人だから、うまく逃げて帰るような人でなかったといつて、奥さんが嘆いておられたけれどもね。

戦争の話はそのくらいにしておきましょう。

内海 先生が財部先生にお仕えになったころは、財部先生はお幾つぐらいでしたか。

青盛 昭和15年の7月7日に亡くなられたときに60歳ぐらいだったから、昭和7年から8年間よね。最初のころは講義にも必ず出ておるし、ゼミナールの学生を指導されるときに、私が一緒に出て、先生が指導される分を手伝ったりした。それから、英語の論文読んだりというときには、学生にも当たるし、わしにも当たって、私もしどろもどろに訳したことがある。

内海 じゃ、そのころは50歳代ですね、財部先生。

青盛 ええ、60から8引くから52〜53歳ね。だから、40何ぼのときに奥さん亡くしておられるわけ。

内海 財部先生、外国に行かれたのはいつごろなんですか。

青盛 それは亡くなられた財部さんの年譜を私が全部書いてやっとなるから、これ(「故財部教授記念事業」巻末「故財部教授年譜」)見ればわかるわけね。洋行はどいう郵船便で行ったとか。

内海 船ですね。

青盛 船で行ったか。戻りの船が何丸であるかということまで書いとるでしょう。

内海 明治44年(1911年)に、「統計学研究ノ為ニ満3箇年間獨逸国、英国及ビ米国へ留学」ですね。

青盛 熱田丸で行った。

内海 あのころは船で。

青盛 船よね。これと、生きておられたんだけど、高田保馬さんが満60で退官されるときにも、退官論文集のこういうものを私が見て、広島高師時代の歌を追跡したことがある。

そういうふうなことは、15年に亡くなられたから、16年ぐらいの「統計学会誌」の巻頭に、写真と一緒に載せて、「財部先生の人とその著作」というので書いております。

内海 本もたくさん書いておりますね。

青盛 そりゃたくさん書いておられるわね。

内海 「キングスリーと基督教社會主義」まで書いておりますね。

青盛 それも書いてあるし、それから最初の卒業論文の「救貧論」を中心に書いておられる。

内海 相当幅広い先生ですね。

青盛 幅広いわね。

内海 「Ch. Booth」も出ていますね。

青盛 私以上にたくさんの本を読んで蓄積というか、やっておられた。高田保馬さんは、財部さんのような人は、本ばかり買っただけで読んでいないから蓄積が多くて、それほど効果を上げてないようにいっくられたけれどもね。

内海 財部先生は、そういう書籍なんかは、どうなさったんですか。書籍というか、本なんかたくさん持っておられたですね。

青盛 だから、主なものは財部文庫で寄贈して、大学にあるわね。財部家は決して金もらったわけじゃないけれども。ある困縁で、本草の本も入れとる。

内海 「基督教文明の発展概論」というのもありますよ。

青盛 そりゃあるよ。仏教のこともあるし。まああんな人はいろんなものがちゃんと入っておるわね。

これ(“Die drei Bevölkerungsstufen” Georg Hansen)も財部先生の本。この本をくださった。ちゃんときちょうめんな人だから、「1913年7月14日ミュンヘンにて」とか書いてある。この13年という年が、ハンセンの亡くなった翌々年だったわけで、これ見たらもっと早うわかる。

それから「支那及印度経済論」とか、「印度経済要論」とか書いておられる。

こういう人、もちろんボンベイとか香港とか上海とかは通っておられるが、支那の奥地やら、インドの奥地へ1度も行っとらぬ。だけど、ちゃんと文献を調べて、ものをよく知っとられる。ということは、私らがいまごろ仏教の話を聞いたりすると、ある人あたりが、インドのお釈迦さんの生まれたり、死なれたところに行ってみにゃわからぬというから、地理的には行ってみることができなければならない。なぜ2000年さかのぼることができますかということもある。それからここに写真があるということはいいいことだけれども、ハンセンの写真はないわね。

これ(写真)が財部文庫で、こういう額とともに研究

室に残してありますね。

「支那の社会成層」、支那のことをやっておられたときに、一番……。きょうの夕方、財部先生の書をお見せしますけれども、その話までにしておきます。

先生が亡くなられる前、昭和13年のころに、財部さんが本草の文献を調べるために、本草の人の墓が真如堂の近くにある。その墓石の碑文を石刷りしてほしいという注文があった。私は石刷りのことを知りませんから、菊田太郎氏に伝えたところが、石刷りをする用具を用意してこられたので、当時私でも書道習っておったために、画仙紙の白いのを持っとして、石刷りの文をパンパンと写して、それから下手だけど写真を写して差し上げた。そうしたら石刷りの画仙紙の白いのが残ったときに、菊田太郎という人が、「先生にお暇なときに一筆書いてくださいといって渡しておきなさい、そうすれば先生が書いてくださいますから」というので、白い画仙紙を2〜3枚渡しておいた。そうしたら、しばらくして「お望みのものができました」といって、書かれた言葉が「大上師 次師人（大上は天を師とし、次に人を師とす）」という言葉であった。これは大牟春台の言葉で、次に「次師 書（次に書を師とす）」という書物が省略されとるわけ。この意味はなぜかという、私が先生にこういったわけよ。「先生は部屋にもたくさんの書物があるし、世界にも書物が多い。たくさんの書物の中から何を基準にしてよい本を選んで、私らに教えてくださいますか、不思議です」。たとえば、ハンセンを読めとか、私の研究が一向進まぬから、あれに勉強させるためには広島県の移民をやったらよかろうということをいわれたために、私が移



民研究をした。それから、移住問題からハンセンの書物を紹介されたから、「先生、たくさんある本の中からいい本を選ぶのには、どうしたらいいのですか」ということを聞いとったから、そのことを頭に置いて書かれたのがこの書なんです。

太くて上等というか、最もいいのは天を師匠とすることである、次に人を選んで人を師匠とすること、天と人と、その人の書物を師匠にすることであるということやね。だから、天然自然の法則を師匠とするのが第1義であって、その次に人を師とするという考え方は、太宰春台の言葉だけれども、ある意味では鹿児島県人として、西郷南州とか、そういうふうな天然自然という法則性があったのじゃなかろうかと思う。

内海 鹿児島県出身ですか。

青盛 この点は統計の対象についてもいえることで、自然現象と社会現象との間に、いかなる区別があるか。財部統計学においては、天然現象と自然現象とをうまく統一的に理解するという点があった。だから極端に言えば、同一のものの自然的な面と、それから社会科学の二面性がある。

これに対して蛭川さんの場合は、失業者というような概念から入るから、考え方が非常にシビアにあらわれてくる。

内海 蛭川さんの場合には社会的な面だけでしょ。

青盛 失業者集団という、社会的な面だけでね。そういうことになる、私が移民研究やって広島へ戻ってきて、移民より先に、ツバメが年々どの程度広島へ帰ってくるか。ツバメの集団は社会現象じゃないけれども、原爆の

後、ツバメが余り寄って来ぬのはさびしいじゃないかというような理論にもなってくる。

内海 いま余り寄って来ないんですか。

青盛 まあ、戦前よりは少なくなったね。

内海 来るには来るわけですね。

青盛 陰陽と関係しているんだ。

内海 自然現象と社会現象を含むわけですね。

青盛 含むわけ。だからこの言葉でもわかるように、書物を選ぶ基準は何によって選ぶかということをしたときに、背景にはこのハンセンを、たくさんの本の中から選んでこられた理由はと聞いたわけよ。

それともう一つ、私が結婚ということについて自分なりに問題としておることは、当時、タールドというフランスの学者の「模倣の法則」というのがあった。移住でも同じように、なぜ玄島果民がアメリカ、ハワイへ行ったかということ、明治元年の人が行ったから、そのまねをして行ったという説明をすると、「模倣の法則」。最初の人はずなぜ行ったかということと困るわけよね。そのために結婚は、なぜ結婚するのかということ、ほかの人が結婚したからそのままするのじゃということ、説明にならぬでしょう。こういうようなことが、「模写説」になるというふうな理論にもなる。そういう意味で、「模倣の法則」というものをどうやって断ち切るか、結婚というものは、それ自身が独創でなきゃいけない。ほかの人と似ておるかもしれないけれども、私は私の結婚というもので乗り切らなきゃいけないということが一つ。

それから最後にいいたいことは、戦時中、古い文献は大学に残っておるけれども、新しい文献は入らぬ。それ

だからジューズミルヒなんか翻訳しておる傍ら、つい「論語」や「孟子」みたいなものに興味を持って読む。その中で、「論語」の中の言葉がいつもひっかかっておった。「~~賢~~<sup>知</sup>~~知~~<sup>知</sup>知」という言葉があった。京都大学にも、「論語」の大家がおられて、いろんな解釈しておられるけれども、戦時中に読んだ山口察常という人の論語解釈によれば、こういう解釈しておられたので、私は若い人に説明するときに、この話をこういうふうに設定しておるわけ。孔子さんが50ぐらいのときに、二十何歳の弟子の子夏という未婚の男の弟子が、50代の孔子さんに対して、「孔子先生、私もぼつぼつ年ごろになって、娘さんを選んで結婚したいと思いますが、女の人を選ぶ基準はどういう基準が必要でしょうか」と質問した。そうしたら孔子さんが、妻を選ぶときの基準は、「賢い人を賢い人として選んで、決して色形に迷ってはいけません。色形にかえて賢い人を賢いとして選ぶなさい」というふうに解釈したと、この山口察常の「論語」に書かれておる。その解釈は当たっておると思う。

そこで、もし女の弟子がおって女の先生に、「夫を選ぶ基準はどういうものですか」ということを質問したと設定しましょう。そうしたら、女の孔子さんはどう答えるかというところ、これをひっくり返すわけ。「~~知~~<sup>知</sup>~~知~~<sup>知</sup>知」と。だから、色形のすっぱりした人をよいとして選んで、賢い人のかわりにしなさいと答える。賢い人を選ぶためには、みずから賢くならにゃいけぬ。形を整えようと思うと、形を整えるのがどうであるかということが必要がある。これが形であり、これが質であるという意味になる。

統計というものは、まさに形なんだけれども、形だけにとらわれたら質がわかりません。質だけにとらわれておると、チェックができませんということになるのじゃないだろうかということです。

内海 まあ、形も質も両方一緒なんでしょうね。

青盛 それから両方わからにゃ困る。わからずに遠ざけたり何かしては困る。それをつなぐものが論理であり、言葉であり、歌であり、詩であるわけだからね。

内海 それで先生、そこで数多くの本の中からハンセンを選ばれたというのは、どういうわけですか。

青盛 だから「ハンセンの本があるから読んでみろ」というふうにおっしゃったわけ。「なぜこういういい本が選べますか」といって聞いたわけよ。そうしたら、本を読まされるよりその人のあり方を知らにゃいけぬ。そこでハンセンという人はどういう人かということとを、幾ら伝記を尋ねてみてもわからぬ。というのは、私の本に出ておるように、同じ名前でも農政学者のハンセンという人がおった。その有名な人だと思われておったために、この人の伝記がわからなかった。この人の伝記を私が調べてみたところが、「説教集」以外には、「労働者の生活」と、この本だけだった。そこから結局、マルサスにもたくさん著作があるけれども、ライフワークとしては、「人口論」1つあるように、ハンセンにもこのマルサスの「人口論」を継承した、移住の問題を扱った、これ1つだけ。

それなんで、私の家へ来てもらったらわかるけれども、これも聞きかじりでよくわからぬけれども、一休が書いた書じゃろう。「漁夫生涯竹一竿」というのがあるわけ。私自身そう思っておるわけよ。だけど、そういうふうな

言葉にとらわれたり何かするのは、京都文科大学系の卒業生の悪いくせだろうと思うんだけど、まあ、しょうがないわね。

徴兵統計のように、軍の機密に属することは書かれぬわね。だけど、一番眼目となるところは、徴兵検査の合格率をもって、都市と田舎とのどちらが優秀であるとか不優秀であるとかいう議論が行われた。そんなことはないというので、徴兵統計についての議論を、統計局かどこかにおった井上という人と文通を交わして、議論し続けた時代がある。徴兵統計については、非常に機密性が高い。なぜそういう機密な文章になったかという点、移民統計で府県別と比較するときに、結局20歳以上で外国へ在留しておると徴兵延期ができた。そうすると、各府県人口における在外徴集率というもので、一番移住の多いのは沖縄県であるということがわかる。だから、移住統計のために、徴兵検査の結果を利用したわけ。

たまたま、京都大学に入ってしまった人の移住統計の身長とか体重の分布を利用して、社会統計の中に、日本人の壮丁の身長と体重の分布と平均偏差というのを計算して出したからね。結局くりごしになるけれども、戦時中の秘密というものが、わしの論文を書く意欲を失わせたことにもなる。

25年に国勢調査が復活してから、書こうと思っても何かちぐはぐのことがあったり、その間のことでいえば、ライス勧告というものがでて、日本の統計制度を近代化せにやいけぬということと、統計制度について、日本の統計法の原文はアメリカ語であって、翻訳の仕方がおかしいということもいったり、それから統計制度なり統計

法について議論したりするのがそういう時代の問題になってくる。

何分にも広島県の田舎において、県の統計の雑誌に何か書いたりいうたりしても、だれも「そうじゃ、そうじゃ」という者はおらぬということで、いつの間にかやら消えてしまった。

その間において、文部省の科学研究費をもらったという意味で、「戦争の人口に対する影響」とか、昭和25年の国勢調査の結果を利用して、当時は60歳以上の年寄りの割合が何パーセントになっておるかということと、府県別と市町村別に区分して、「長命村と短命村」というふうな文章を書いた東北大学の近藤正二という有名な教授がおるわけ。そういう論文を、移住関係を考えると長命村、短命村をいうのはおかしいということと「統計の泉」に書いて、そのことを大阪府の「統計」へ転載を許したところが、兵庫県が転載させてくれ、それから鹿児島県が転載させてくれ、広島県と、4つの都道府県で文章を転載したことがある。で、向こうの方は九州久留米大学の安部教授が試みた宣伝のパンフレットからでした。

話はとびけれども、石橋正二郎という、ブリヂストンタイヤの社長が、これはいい論文じゃといって転載した。そんなのおかしいといって、やっつけたんだけど、結局彼にしてみれば、ブリヂストンのタイヤを輸入するためには、日本の米の生産を圧迫してもいいから小麦を輸入する、そして小学校の児童にパンを食わすという政策に便乗した。そういうのに対して真っ向から論議をいどんだんじゃけれども、やっぱり消えてしまったわけ。

その国勢調査の市町村別の老人の割合をもって、長命

村ができ上がった。若い者が働きに出ていなくなると短命村になったりするというのはおかしい。だから、現住人口、あるがままの人口と、これを一般化して人口法則を求めたり、生命表を求めるという考え方と違うわけよ。そういうようなのも「社会統計研究」の付録の中に出ておるのを、順々にたどっていけばいいがなと思ったんだけど、その「附録編」のある本がいまわしの手元になくなってしまったから、「長寿と食糧との関係について」、「米食は短命のもとですか」こう聞いとるわけよ。だから、この論文がどこかの註にあるように、昭和30年に、大阪と玄島と兵庫と鹿児島の前県の統計雑誌に紹介されとるわけよ。別に原稿料はもらわなかったけれども。(笑) その現代版が、後で述べる「老人だらけの国」になったり。そこになったら、またゆっくり話をしましょう。

内海 今度新しいのには、それは……。

青盛 それは教科書に使うのには全然要らぬし、初めのころはつけておったんだけど。だから、テキストとしてはこういうふうな正面切った話ですよ。それから、統計的研究として実際に使ってみるとどうなるかということよ。最初の「人と学説集」というような場合は、12ヵ月でいいのを13人おいておるようなこともある。

「統計で、すべてのことが証明できますか」という話がある。だから、どうしても証明しようとかかるわけよ。証明できぬことまで証明しようとしたらいけないわけ。

それと何よりも肝心なのは、その統計調査によって、私が何を知り得るか、何が知りたいのかということと対

決せにや困る。物知りになることでもないし、それから自分が博士論文とるためでもなし、まあ人に説得する必要ないわね。自分がどう合点がいくかということ、ハンセンなんかそういう悟りというか、知りたいことと知りたくないこととがはつきりしとったね。それがはつきりしないと「統計とは何ですか」というようなことになって、きょういわなかったけれども、統計及び統計学の定義が、ジューズミルヒの時代には40〜50だったけれども、ケトラーの時代には百何十何ぼになって、そりゃ数多くある。だけれども、少なくとも、私は統計及び統計学をこう考えますということがわからなければ、統計学を研究するわけにいかぬ。「初めに統計あり」というか、順々にたどっていくわけだけれども、いつの間にか統計とは似ても似つかぬものが統計的研究や何かになってしまって、びっくりすることがあるわね。

だから、最近でも、統計の環境が悪くなったということについて、統計関係者に「あなたは統計及び統計学を何と考えられますか」ということを、予備概念を与えずに質問すると、大部分の人は計算及び数学である、表グラフであるという計数思考が63%、大学生がそういう。残りの20%が調査である、残りの5%が人口その他であるという結果から自分の意見をまとめようとする、私はわからぬけれども、おまえのいうとおりそうじゃという。それなら質問する意味はないわね、そうじゃそうじゃといって。

結局、ピエロ——（註）一席の「ピエロの如く競舌に語るに墮せば悲しからずや」の歌がある——というもちももっとしっかりしたものを持っているんじゃないだろうか



ども、ピエロもそうだし、まあ、お茶の話になると、茶坊主というものがあるわね。茶坊主というものは見識持つとらねもんだと後の人は思っとなるけれども、やっぱり初めての茶の宗匠の、堺の千利休という人おるわね。ああいうような人は、秀吉と天下を争うだけの度量持ったけれども、勝てば官軍負ければ賊軍で、しょうことなしにああいうことになっとなるわけよ。

内海 先生がグラントのラテン語を翻訳して、衆愚称賛のために執筆せず、少数の-----。

青盛 読者のためにやるんで。

内海 それで満足する。

青盛 満ち足りてというか、満足するのが自己目的じゃないということよ。

「老いゆけよわれとともに」英語では“Grow old along with me”という。わしが歌心持っていうと「老いゆけよ」というのはおかしい。「たとえ老いゆくともにせぬと、「老いいきやがれ」というんじゃ救いがない。神とともにあればよい。

内海 “old”というの、旧約聖書のオールドですね。

青盛 熟成というか。

内海 なつかしいという感じで使うんですがね。

青盛 そうということよ。

内海 “old”というの、非常に英語では意味があるようですね。

青盛 これやら、クラークの「青年よ大志を抱け」でも、正解は、55歳ぐらいになったクラークもがんばっとなるんじゃから、若い人もなおさらがんばれということ、自分をたなに上げて、天国に近づいているのに、おまえら何

かやれじゃ困るよね。

(註) ここで青盛は「ブラウニング」のラビ・ベン・エズラの詩の冒頭、「人生の最後、全てを見よ、しかして恐れるな」を語ろうとした。内海は、「何事か成せ、なさざるべからず、生まれたものは」(櫛田民蔵)を引用した。

青盛 平凡社の「経済学事典」が出たときに、「経済学事典」の中に、私に書けといわれた項目は2つで、「人口学とは何か」ということと、「人口理論とは何か」ということの2項目を書いた。平凡社の2項目なんかには、だれが書いたかという名前は書かさないわけよ。

内海 ああ、名前出ないんですか。

青盛 だから「統計学とは」ということで、統計学史のことを大橋隆寛が書いたわけよ。名前は書かれぬけれども、原稿料は何かしかきたわね。

次に、南亮三郎氏が「人口大事典」というのを出すから、わしに協力してくれと書いて書いたのが、いま渡した文章やね。

内海 これは昭和何年でしたか。戦争が終わってからですか。

青盛 いや、現物がわしの家にあるから。こっちが「経済学事典」28年で、こっちが「人口大事典」30年ぐらいかな。

そして前後して、「統計用語辞典」の中に「静止人口」やいろんなことが出ておるんじゃないけれども、結局第2回の「人口白書」が出たのが49年4月よ。34年の第1回の「人口白書」に続いて第2回が出たわけ。その中で、静止人口ということがとんでもないことに書かれておるのを見て、びっくりしたわけよね。そうしたら、22年ごろ

出た杠文吉という人の事典にも、それから49年ぐらいいに出た上田正夫の「人口学」の本にも、静止人口というところが出ておるのが、こちらの期待に反するような叙述になっておるのでびっくりしたということも、「人口白書批判の序説—静止人口と再生産力について—」で書いておるわけよね。

したがって、その両方の本を通じていいたいことは、平凡社の「経済学事典」のときには、人口学とか人口理論というものはどういうものを取り扱うべきかということとを项目的に書いておいた。そして、その具体的な理論人口についての中身というか、事象的研究というものはこれが実例になる、こう書いたわけ。

その構成は、私の本において、人口統計学史に当たるハンセンとジューズミルヒと、その実証として、国内移住の問題とか、男女別の性別の判定がどうなってるか、そしてどういう意味で男女同数、やや男が多くなってる、それが死亡率においては男が多いけれども、結婚年齢においてはほぼ男女同数になるから、有配偶の1夫1婦制度が神のおきてだというグラント以来の命題に当たるというふうな叙述の仕方をしておる。

そこで、この年になってびっくりしたことは、私の本を出したりした勢いで書けば、静止人口、静止安定人口というものは、出生と死亡と全部を通じて考えたら、人口は増加しながら、あるいは減りながら、静止しながら全体を考えるとということであって、封鎖してふえも減りもしないというものではなかったのが、いつの間にやらそういう誤解がテーマになってきておる。それが現在まで及んでおるというので、びっくりしておる。

そうしてみると、この「人口学事典」を出した南亮三郎と私との関係という説明になるわけですね。南亮三郎という人と私との関係は、まさにハンセンの「人口論」の紹介をしたことにおいて、南亮三郎がこれを取り上げて、そして林恵海という社会学の人が取り上げた影響だね。

そういう結果、日本統計学会が昭和18年(1943年)に北海道の小樽で開かれたときに、南亮三郎がぜひ私に来いといって、特別に招待状をよこしたわけよ。

内海 このころは小樽にいたんですね。

青盛 小樽におったわけ。ぜひに来いといってね。来いといっただって、当時は、19年ほどではないけれども、命がけで行くような状態。

内海 機雷があったかもしれぬ。

青盛 あったかもしれぬ。そこまで心配せぬけれど、100円ほどの旅費を用意して、行くばかりになっておったわけよ。何かの都合で取りやめることになって、速達で報告を出して、手紙で出した分は統計学会の報告として記録されたかどうか知らぬわけよね。それで終わったわけよ。(南亮三郎「人口思想史」にハンセンあり。)

そうしたら、18年以後、19年になって、洞爺湖のとなりの昭和新山が1夜でドッと爆発して山ができたわけ。だから、昭和新山のできる前に北海道へ行くはずだったのが行けなかったわけよ。

それから10年たってかす何年たってか、昭和29年ぐらいじゃろう、同じ小樽で統計学会が開かれたわけよ。その開かれた前の年に、13号台風で、洞爺丸が沈んだというような事件が起こった。この洞爺丸はなぜ沈んだかと

いう記事が、この夏「文藝春秋」に出たのを、この前の学会のときに、息子のところにあるのを見たら、洞爺丸がなせ沈んだかというときに、「15号台風のために沈んだ」と書いてあるわけ。当時は、台風を女の各前で呼んでおったわけ。ジエーン台風とかキティとかいうので。13番目だから。A B C D E F G H I J K L M. Mだな。どうでもいいけれども、わしは13号台風で覚えておるわけ。だから、13番目の女の各前で呼んでもよろしいのね。これがいつの間にやら、13号が15号台風に誤植されとるわけよ。

それはどうでもいいけど、北海道で第2回の統計学会が開かれたときに、前年に、北海道から来るはずの洞爺丸が沈んだというあとを回顧するために、統計学会の終わりのときに洞爺湖へ行って、朝、昭和新聞も見て、その朝、洞爺丸に乗るために函館へ来て、青森から夜中の汽車で日本海回って帰ってきたことがある。

その学会のときに、人口問題研究所の館総が学会報告をしたわけよ。それに対して、人口統計的な批判を私がコメントし出したら、小出保治君が、さすが統計やっている人が批判をしたのはいいもんじゃなあという話をしたわけよ。そのころまでは、館総と私との間に交流もあったし、当時としては、ああいう統計局や人口問題研究所の人が、統計学会を通じて意思の疎通というか、交流を多少やっとなつたわけ。

その間に、彼の人口統計学という「形式人口論」という著書ができ上がって、経済学博士をもらったりするけれども、そのころから急速に、彼のいっておる言葉がそのまま使われるようになった。一つとしては、昭和23〜

24年のたくさん生まれた子供のことを「ベビーブーム」というわけね。そうしたら、その「ベビーブーム」をいっても反復して、この「ベビーブーム」のときに生まれた女の子が結婚して、昭和47~48年に第2の「ベビーブーム」といっておるわけ。こういう「ブーム」という言葉は、そのとき生まれた人に対して、それから戦後ようやく帰ってきて結婚できて子供を生んだ人に対する侮辱だというふうにいっておるわけ。私自身が、日露戦争の後のブームの子供だというふうにして侮辱された覚えはないわけよ。しかし名前が和雄であるために、「カッチャン数の子ニシンの子」といって悪口いわれた。(笑) しかし、又夫に生まれたおかげで、中学校に入るときに1年落第したけれども、その翌年は中学校の100人の定員が150人になったわけ。高等学校に入るときには、それまで高等学校の数が足りなかったのが、姫路と広島とにできて、それだけ学校へ入るのがたやすかったわけよ。そういうふうになってきたということと、それから、その後急速に学会も変動してきたということとをいいたいわけ。

それで、この印刷物に書いてある内容をちょっと紹介しておくと、「日本の人口を具体的に論じると、人口動態という個所で、婚姻という、結婚及び離婚を問題にする」というのと、第2節において「出生」という現象を取り上げたわけよ。出生があって、初めて死亡があるんじゃないかということよ。

それから、婚姻統計というふうにいっても、日本統計学会に報告したこともあるけれども、法律上の婚姻関係とは違うわけよ。具体的にいえば、結婚というものと離婚というものを一緒に取り扱う人口動態の概念だ、こ

ういう考え方で結婚と離婚の年次別推移というものを、人口の発生率において問題にするという点と、季節的変動として昭和24年から28年まで、結婚、離婚が月別にどう変動しておるかというふうな議論と、それから、挙式から届出までの期間別結婚数と比率とか、同居やめてからというようなことも問題にしておるじ、それから、初婚の平均年齢の分布とかいうことで、夫と妻の年齢の組み合わせというような問題を論じておるわけよね。

私のいいたいことは、結婚8組について離婚1組があると、8分の1というふうな結婚対離婚の発生率をとることは間違いであるということよ。歴史的にも、ベルギーの「ポピュラチオニスティーク」というのがあります。これを「人口学」という言葉の語源に、私は使っておるわけですが、この場合にも、たまたま結婚対離婚という比率をとっとるわけだね。発生的にはやむを得ないけれども、後で述べるように、人口静態と動態とを組み合わせるという立場からすれば、年々の結婚と離婚の差が、国勢調査の有配偶、男女別ということになるわけ、だから、有配偶の男の数と女の数が、国勢調査のたびごとにどうなっておるかということが問題になるわけ。古くは、有配偶の男の方が女よりも少なかった。だから、1夫1婦制度と関連があることじゃけれども、動態統計の場合は届け出るときに1夫1婦制度が確かだけれども、有配偶の人を聞くと、外国へ行っとる人を除いて「私は有配偶です」という女の方が余っておる。これが国勢調査のときり常例というか法則であつた。それが、昭和35年から40年ぐらいのときに遂に転じたことがあるわけよ。それは、住居事情でそうなったんだらうと思うけれども、ここぞ

またもとのとおりになったわけよ。

私のいいたいことは、国勢調査のときの有配偶の人が、その年に何人離婚したかという発生率をとれば意味がある。しかし、男をとるのか女をとるのかということになると、差があるけれども、女をとれば安定しておるだろうと、人数を調べてみると、1000組について4組か5組よね。正確に言えば、ウソでも当たる確率よ。

だから、有配偶の中から無配偶が出てくるという意味では、離婚の発生率は決して大きくないわけよ。それを、離婚統計を原因として、社会の結婚の不和とか、不良少女の発生とかいうふうに意味づけると、とんでもない過ちを犯すことになる。

離婚することはいいいことではないけれども、この季節的変動を見ると、たとえば3月あたりに離婚が多いということ、4月に再婚するということにもなるわけ。

それから移住の波を見ると、毎年4月に高まるわけよ。だから移住の年度は、4月から始まって翌年の3月に終わるというような年度で計算せにゃならぬ場合もある。

そういう点で、結婚及び離婚における季節的変動を調べてみると、1年を突っ込みに計算しないというところに意味があるんじゃないだろうかという意味で書いとるわけですよ。

出生についても同様で、月々どうなっておるかということ、私の調査のときには、動態統計が戸籍につながっておる場合には、12月が少なくても1月の出生が多いという偏りがあったわけ。それが影響しないような意味で、大阪府の医師及び産婆が直接報告する統計というもので、わしの本を書いたわけ。



戦後、昭和19年から21年まで、動態統計調査が欠如した時代がある。その後、復活したときには、戸籍届出によるもの一本になってしまった。

それともう一つの大きいことは、それまで統計課の第1課が人口静態、国勢調査を扱い、第2課が人口動態というふうにして、統計局において、人口静態と動態とが車の両輪のようにうまくコントロールされておった。その差額を移住率というふうにいつたりしてできておったのが、統計法の改正と、人口動態統計を厚生省に移した途端に、医者が、医者でない役人の食い物になったために、死亡率とか離婚率に重きを置いて、結婚とか出生のところはほとんどないがしろにされておる。

それから、月別の動態統計も男女込みであって、どういうことかわからないし、まして死産とか何かは男の割合がかなり高いわけよね。そういうことで、一方的に死亡率がどうなったということを、厚生省の人口問題研究所はいつておればいいわけ。出生がどうなっておろうと問題じゃないわけ。しかし、丸山博君のような熱心な人があると、バイタルインデックスというので、生後1週間目の死亡率はと、こうなるわけ。

だけど、乳児死亡率というときには、零歳の人口が問題になるわけだ。零歳の人口が毎年国勢調査をやるわけではなかったら、そのときの出生数をもって、その割合をためすというふうになって、そこにおいて結局、静態統計と動態統計のつなぎという問題が出てくるわけよね。まあそういうふうなのが、これの説明になったわけね。丸海先生は出生と結婚に力を入れるべきだといわれるんですね。ところが、死亡率や離婚率に力を入れたとい

うのは、どういうわけですかね。

青盛 どういうわけかね。だから、わしらが人口統計を扱ったり、マルサスを扱うと、結局出生の割合は25年1世代たてば、自由に放任すれば2倍、4倍、8倍になる。これに対して食糧の増加は、年々算術級数として差としてふえるだけであるということを用いるけれども、トータルの計算をする立場からはどうなるか、トータルの考え方がマルサスにおいては世界の人口になるから、移住関係というものは抹殺されるわけよ。そして、出生数と死亡数というものが、年々の出生、死亡の差でなくて、25年たてば1世代の間に人口は2倍になるという計算になるわけ。

1世代を、男においては30年、女においては20年、これをプラスして2で割ると25年ごとに1世代に人口が変化するというふうにして、人口論なりの命題に、出生、死亡というものの情報が車の両輪としてあらわれておるわけ。

そのことは、ジョン・グラントにおいても、300年前に教会にあって、教会の「週報」というか通知が出てくるわけよ。この週間に、教会の信者で洗礼を受けた者が何人、埋葬を受けた者が何人、この期間に結婚した者が何組という統計があらわれるわけ。しかし、イギリスの国教や旧教においては、離婚を許されていないから、離婚統計は出てこぬわけね。

だけど、それを集計して、1661年のグラントの本の前の30年間、40年間の出生、死亡をとってみると、最近の10年間においては、出生数イコール死亡数という条件だった。それを遠観して見ると、出生、死亡の差額はゼロ

だから、この間のロンドンの人口は、田舎からロンドンへ入ってくる人によって充滿されておるという命題が出てくるわけよ。だから、それを静止人口であるかのように考えたのが、私の本の付録に出ておるクチンスキーの理論よね。「ジューズミルヒまでの都鄙人口周流理論」というものがどうなってきたかというこどを、クチンスキーの理論によって調べたわけよね。

そうして見ると、その点においては、高野岩三郎さんの「ジューズミルヒの人口論」というのや、「人口思想史論」という玉井茂の文章なんかにも出ておるし、財部先生の「ケトレーの研究」とか、高田保馬の「階級考」に「ハンセンの人口周流」という言葉が引用されておることは、政治算術学の最初のジョン・グラントとペッティ、それからグレゴリー・キング、ハルリー、デパルシェーという、ジューズミルヒに至るまでの人たちが挙げられておるわけよね。これは、ハンセンの「人口論」を批判的に利用した、クチンスキーという人の「都市果住論」という本のページを利用したわけよね。

だから、そこでグラントとペッティとの根本的見解を、その人の説明によって説明するとどうなるかということになるわけですが、ここで先ほどの松川君の「経済学事典」、岩波文庫に出ておるのによると、どうも松川君は、あのときにはグラントとペッティとが共同の作者だというふうに、ちらっと書いとるね。やっぱり質的に考えると、共同の作者というのはどうもおかしい。ただ、学者として、政治家としてのペッティがグラントを立てた、別に彼の論文を盗んで自分がどうしようというのではない、こういう有効な論文を政策的に、政治的に活用しよ

うと思って、共同製作のように書いてだけで、決して彼の手柄を盗むつもりで書いたのではないということも、私はそういう点は論証でなしに、信ずるよりほか仕方がないわけよね。

それから死亡率については、死亡表の作製という点がイギリスのロンドンへ移ったり、ブレスラウの死亡統計を利用したりというふうな変化になる。これがジューズミルヒにおいて、都市の人口というものが、ドイツの国全体の人口として総合的に利用されておるという点を書いてある。

それからとぶけれども、先ほどの「人口白書」に突然として出てきた、静止人口というものと、人口の再生産力というものと、混同したらいけないという意味で議論しておるのが、「統計の泉」に載っている。

この第2回の「人口白書」の副題に「静止人口をめぐって」というスローガンが掲げてあるけれども、どこにも静止人口とは何かということが書いてない。付録の用語解説によれば、こう書かれておる。これは現在でもそのまま利用されておるわけよね。「増加も減少もしない人口、すなわち、人口移動が全くない場合に出生と死亡とが等しく、その差の自然増加が0となった人口をいう」。そこから、「ある年の女子の年齢別出生率と、男女年齢別死亡率が、その後いつまでも不変と仮定した場合、現在の人口が全部死亡してしまった後に現われる人口は、出生率と死亡率が一定となり、その差の自然増加率も一定の値となる。これを安定人口と呼ぶ。安定人口のうち、出生と死亡とが等しくなった場合が静止人口である。」その次に「実際には、生命表の計算によってえられる人口

であって、理論上の人口の一種である。」

理論上の人口の一種が、なぜ理想になったり、それを念願しているということになるか。だから、私は生命表の計算についてもいいたいんだけど、こういうふうに瞬間の人口というわけではなくて、与えられた年の各歳別死亡数に、国勢調査の静態人口がわかったり推計すれば、各歳別訂正死亡率が得られる。その各歳別訂正死亡率によって、零歳から100歳まで完全に死ぬと仮定した人口を静止人口というわけよ。そのかわり、出生数イコール死亡数だから、年寄りの割合が非常に高いわけ。平均すれば70歳なり75歳で半分死んでしまうことになる。しかし、そういう零歳の平均寿命で半分の人が残っておるわけじゃないけれども、平均においては残っておるかのようには仮定してあるわけよね。だから、そこに「人口白書」における静止人口の誤解がある。

もう一つ、この本における「人口爆発」という定義も、きわめて粗雑であっておかしいといっておるんですが、「第2次大戦後の開発途上国において、死亡率は低下し始めたが、出生率は高い水準のままなので、その後の自然増加率、すなわち自然増加率がきわめて高い。この人口増加をジャーナリズムで形容して『人口爆発』と呼んだもの」である。「これでは、人口増加の事実をそのまま『不必要な害悪』と見なしているような、ポール・R・エーリック著の『人口爆弾』という著書の日本版を先取りした説明にすぎないではないかと思われる。」というふうに批判しておるわけ。あと「静止人口の学史的意味」というので、“stationary population”とか“stable population”というものを最初に説明したハンセンの引

用なんかしております。

要するに、現実の人口をとれば、出生率が1000分の15で死亡率が1000分の6ということになっておれば、1000分の9の増加率になるわけ。そうすると、現在の世代の人口は3世代の者が同時に生きておるわけだから、出生イコール死亡になったら大ごとなんよね。極端に言えば瞬間であっても、これが100年間続けば完全にゼロになってしまう。そういう人口はあり得ない。だから、粗出生率と死亡率の差の粗増加率というものは見せかけであって、本当の増加率でないということがわかるのは正しい。そういうふうに、思っておることが現代でも行われてないから、どういう議論をしたらよからうかと思っておる。

内海 本当の増加率はどうやって出したらいいいんですか。  
青盛 本当の増加率を出すためには、再生産率というので、女だけをとって、その女が生まれてから5歳から50歳までに生き残る人口をとれば、再生産率ということになるわけ。だけど、それは女のみが子供を産むので、男は産まぬということになっておるし、国勢調査のときに、各歳別で「あなたは何人の子供を持ったか」というようなことを聞いたりして、「何遍結婚しましたか」というような要らぬことを聞いたりしても、そうやって得られる再生産率というものは、いつの時代のものかはっきりしないわけよ。そこで、簡単に増加率を出すためにはどうしたらいいだろうかという工夫が、先ほどの出生率の中に含まれておるといふのは、1950年から54年の間の出産順位別出生性比というものがあるわけよね。当時は、第1児から第9児までと、10児以上とあるわけよ。これを

百分率に直すと、第1児が26.5%、第2児が28.0%、これが1950年よね。3児以下こうなっておるわけ。

そうすると、第1児、第2児、第3児という10児までの人間に男女別があるわけ。だから、この構成比をとる場合には、男女総数と、男の順序数と、女の順序数とができるわけ。

だから、総数でとっても男女別でとっても、夫婦の間に、第1児が26%であれば、26%を1倍するわけ。第2児の場合には、これを2倍するわけ。9番目までを9倍する、10児以上を仮に10倍すれば、100の家庭において何人の子供が生まれたかということがわかるわけ。それを2で割れば、そのときの有配偶の子供がある家庭においては何番目が生まれておるという計算ができるわけ。これで1950年当時をやってみると、わりあい再生産率が高いわけ。

現状においては2人で1.8人ぐらいですから、2で割ると0.92か0.82ぐらいで、生産力は非常に落ちておるといことはわかるわけよね。

ただ、その間の研究においてわかったことは、出産及び出生の順序数ではなくて、男女別の長男か次女か三男かというのがわかるだけで、言葉の意味どおりの出産順序数は、戸籍の届出においてとられてないということがわかるわけ。それでも、丙午の年には50%が第1児であった。それから、ベビーブームの時代においても、最近においても、第1児よりも第2児の割合の方が高い場合が起きておるわけ。ということは、第1児を生んだときには少なかったけれども、第2児を生む人が多くなったりしておるわけよね。同じ人の系統的なものじゃないわ

けよね。というふうな議論もできるわけだと思う。

それを根本的に気づかされたのは、ことし統計講習会  
のときに、こういうふうな原稿で統計講習会をやってお  
るんですよ。そのときに、ある人が「静止人口というも  
のはどういうものか」ということを聞いていると人がい  
うものですから、どういう人が聞いておるかと聞き返し  
ますと、厚生省の人が静止人口を利用してそんなことを  
いうているというものですから、「そんなことがあるか」  
というような意味で、先ほどいった杠文吉と上田正天の  
事典及び「統計的研究」を見ると、また間違った定義が  
なされておったということがわかったので、それをこめ  
て書いたのがこの8月号の「人口統計管見」の人口動態  
の問題になる。だけど、この年になって、あいつは間違  
っておるなんてことをいうよりも、私はこういうことが  
わかってよかったと思うんですがという言い方の方が、  
話がよく通ると思うんですがね。

内海 そうですね。

青盛 「国勢調査特集号」、この「はしがき」のところで  
一応述べておるんですが、その序文に載っとるのが、「国  
勢調査のはなし」というパンフレットを批判しながら、  
ことしの国勢調査は、何が知りたいから、何のために調  
査をするんですかということを知りたいわけよ。だから、  
この「人口統計管見」の「はしがき」で問題になってお  
るのは、「国勢調査のはなし」として、「図説・経済教育資  
料NO42」というところで問題にしておるのを聞いておるわ  
け。

そしたら、「日本の人口」というときに、こういうふう  
に「50年後に静止する人口」、「低下している出生率」と



いう形で説明しておるのによると、「年齢区分別人口および人口増加率の推移」というので、大正9年から昭和50年まではいままでの過去の統計、この分は調査されておるから、15歳未満と、15歳から65歳未満と、65歳以上の人口が現にある。その間において、20年の人口だけは年齢構造も何もない。これは、内訳がないわけ。そして、55年からが全部推定になって、20年、30年後まで延長されておる。この延長されておる意味を説明で読んでみるとどうなるかということになった。

国勢調査のたびごと、5年間の人口増加数というのが11回がある中で昭和20年の分だけが、増加数及び年増加率がマイナスになつとるわけね。ということは、出生率と死亡率が逆転するかひつついておるということだ。その年が人口増加がゼロだから、この人のいつている静止人口のはずなのよね。それが何で将来になって、「厚生省人口問題研究所の将来人口推定結果によれば、わが国の総人口は、おおむね50年後に1億4000万人程度で静止人口に達すると推定されています。」しかしこの死亡率によれば、「もっと早い時期になるものと予想されます。」といつとるわけ。50年後の問題じゃなくて、現在の問題を問題にしない。20年後は、これから20年間に生まれる出生率の問題をどう考えるか、だから20歳以上の20年後の分は死亡率によって推定できるわけ。肝心の15歳未満の推定をどうしていますかということ。結果においてわかることは、この65歳以上と15歳以下とを同じ絶対数に置いとるわけよ。そうすれば、結局全体を100とすれば、18%の年寄りと18%ぐらいの未成年者とが割合を分けておる。そして生産年齢人口の4人に1人が年寄りの人口

になって過剰になってくる。

その場合の男か女かという差別は無視しておる。そうすると、年寄りの死亡やいろんなことは、結局女が男の3倍ぐらいおるわけよね。いずれにしても、その静止人口のバランスなり計算が合いませんよということを用いたために、順々に全国人口の動態的変化と、それから最初に全国人口の53年の出生数、死亡数、性比、結婚数、離婚数というものの季節的変動を問題にしておるのは、1年間を総平均したって、1日当たりにしたって、出生数は季節的変動が少なくなっておるからいいけれども、結婚数のような波の大きいものは年平均でとると、月別の特徴があらわれぬわけよ。死亡数でもそうです。ことに死産数をとったりすると、1月前に死産してしまう、9か月目に。先ほどいったように、結婚件数と離婚件数をとると、離婚件数は3月が一番高い。結婚件数は11月と4月、5月に高い。そうすると再婚も含むとすれば、3月の離婚は4月、5月の結婚を意味するということにもなるし、それから、最近の出産順序数の男女別の性比というものを検討したときに-----。

内海 そこで先生、離婚のところですが、その人は、離婚したらまた結婚するわけですか。

青盛 いや、それは個別にやってみにやわからぬけれども、離婚件数をとってみると、たまたま3月の離婚件数が高いということは、その中の一部分が4月、5月に再婚していますねということを用いるわけよ。個別の事例でそれを云々するわけにはいかないわけ。だから、一概に離婚は悪い、結婚はよろしいと-----。

内海 ここ（「統計の泉」所載「人口統計管見」）に先生、

その順位が書いてあるんですね。

青盛 そこは順位が書いてあるんですね。第2表の左端は、出生総数を100とする男女合計の出産順位数による構成比であるというのが、男女合計の計算というかわりに、合算というふうになっておるのは、校正の間違いですわね。男女合わせた総数の計算でもあるし、男の順序数でもあるし、女の順序数でもできるということよね。だから、毎年の季節的変動というときには、この全国についてでも府県についてでも、1日当たりの出生数とか死亡数とか、結婚数とか離婚数とかを出すことは意味がないということをしている。

変動があるのに、何分間たてば子供が生まれ、何分間たてば人が死ぬという比率のとり方が、関数関係であっても、分母から分子が全部発生するというトータルなものでないわけよ。静止安定人口の計算というものは、原因から結果が、生まれただけのものは全部死んでしまうという計算をするわけよ。それで、現実の人口というものは、生死の差額というものがある。そういうふうな組み合わせの問題がある。

ある意味では、ここの学会のときに、川上先生がおもしろい報告をしておられるけれども、あの考え方がどうも個人的であって、冷静な判断でないということがいいわけだ。川上理一先生がいておられることは、こういうことなんだね。あの人が、厚生省の国立公衆衛生院か何かの所長をしておられたときから、ずっとあそこの親分でやっておられることで、生命表やああいうものの大家でおられるわけよ。それで、この生命表というものを、全体として間違っって使っていっちゃるわけよ。

その1例として、ことしの学会のときに報告なさいましたし、その前にあらかじめ、私がこういう内容の報告をするんだというプリントを送ってもらってるわけ。これによって見ると、 $x$ 歳の死亡者のセックスレシオをこうやって計算するんだという意味で、最近の生命表によれば男72歳、女77歳という生命表の結果が出る。77歳で72歳を割った95%が、女に対する男の死亡性比だということをおっしゃってるわけ。

女に対して男が95%しか死なないということは、生命表の死亡率のことになる。生命表の死亡率というものは、男女同数の10万人ずつが死ぬという前提。男女同数という前提の計算結果をもって、男女の死亡性比を出すということは間違いですということをお願いしたいわけ。だが、平気でなさっている。

もう1つは、100歳以上の男女の生存者の数がある。たとえば、女が230人、男が40人であるとするれば、230分の40、だから25%ぐらいしか男は死なない。生存者の性比と死亡者の性比とを混同しておられる。そういうことは、人の生命というものを、個別として比較する場合にはそれでいいんだけど、現実にはここの表（「人口統計管見」参照）のように、全体の昭和51年における死亡性比、男女別構成というものがあって、構成の中から5歳別の各歳別死亡率というものが出ているわけ。全体の死亡率は、女に対して男の方が2〜3割方多いのが法則で、80以上になって女が余ってくる。だから、国勢調査における、静態統計における生存性比と、それから動態統計における死亡性比というものが、それぞれ組み合わせで調べられにやならぬのが、そういう議論になって

おるということよね。

次は、年齢別区分人口の推移という点を、昭和50年と境として、55年以降というものと比較しておる。（「人口統計管見」第6表）それから、最近というか昭和39年から53年まで、干支別に出生総数と出生性比をとってみる。そして何書いたかな。再生産率のつもりかな。こういう時系列に並べた意味は、死産性比や出生性比、出生率をこう並べてみて、そのもととして、受胎したときにどういう割合で男と女とが受胎しておるかという数値を出すために、こういう議論をしておるわけ。

遂に類推してみると、年々によって違うけれども、女100について男108個ぐらいいのところに受胎しておるだろうということがいえる。だから、それと出産性比、出生性比を比較すれば、ぴったりと合う。こういう出産性比や出生の性比を逆算した比率をとらないで、男女同数という仮説をとったりすると、非常に間違いを生ずるわけ。

それであるのかかわらず、性染色体の分裂の50対50をもって、アプオリオだ、先験的確率だとするような議論がはやっておるために、非常な誤解を生いておるという例は、最近でも男と女を自由に生み分けられるという議論をしておる産婦人科の先生がおる。それで、その賛助会員がなんかの産婦人科へ行けば、自由に男と女が産めるといような説が行われておる。このことは、ジューズミルヒ以来の男女の割合の一定と、生まれた後に50以上になったら女が余ってくるんだけれども、有配偶でおるのは男女同数ということになっておるわけ。

だけど、地域的に開きが起こった場合に北海道あたり

は、未婚者の数が結婚者に比べて多いから、どういふことになるかというわけね。現実的には、夫婦が別居、単身赴任したり、そういう個別の事情は生じてくる。だけれども厚生省の指標なんかによると、死亡に厚くて出生は健康な人のお産現象だから費用を出せということになっておるわけ。そして税制と絡んで、3番目から扶養手当を出しておるのは、3番目以上、皆けしからぬなんて、扶養手当出したらいけぬとか、いろいろな議論が行われるようになった。

それと同じような調子で、死亡統計には至れり尽くせりだけれども、出生統計については、男女同数に決まっておるんだというような議論が非常に流行しておるわけで、そういうと説明にならぬかもしれないけれども、現実にはそういうところになっておると思うんですがね。

内海 それから先生、この「第6表」のところに昭和41年の丙午のときですね、この年は女子100人で男子が107.6。これはどういふふうに見たらいいんでしょう。

青盛 107.6 になっておるけれども、出産性比を見ると、109.3と上がっておる。だから、これは当時やっとりけれども、12月とか1月においては、多少繰り延べなり——繰り上げ"ということはないけれども、繰り延べ、繰り上げ"があるから、前後3年間を通じては、ああいう議論になるわけだけれども、この昭和41年は、前後3年間で平均すればどうなるかという議論で一応済むわけだから、大きい立場で出産性比の単純平均ではいかぬけれども、総平均をとってみると、108ぐらいの間をうろついているということがわかる。

しかし、私が問題にしたいのは、43年、44年、45年の

3カ年にわたって、丙午もないのに、戦争の後でもないのに、なぜ、107.1から107.2というふうになったか、これを地域別に検討してみれば、本当の原因がわかるんじゃないかという議論もどこかで展開していますわね。

問題は、明治39年の丙午と比較すると、当時の丙午による減退は前年に対する4%程度であつたわけよ。昭和丙午のときは、最初の絶対数でわかるように、182万生まれておつたのが136万になって、明治33年以來の低い出生絶対数になっている。この2割7分に及ぶような変動の方が大きいわけよ。

だから、前は丙午を動機として年の前後に延ばしただけで、産児制限は行われなかったけれども、現在においては産児制限をしたりすることが大きくなったわけ。日露戦争の後、子供が生まれたがっておつたんだから、5%の減退で済んだわけよ。しかし、戦争もないおかげで、丙午の迷信もないといいながら、これだけの変動が起こったということはどういうことかな。意味があるんだろう。昔の人より迷信づいたわけではないというわけよ。産児制限による利口な賢い人になったわけよ。

内海 いまもまだ迷信はあるんでしようかね。

青盛 迷信を意味づけるような賢ぶった人になったわけよ。(笑) そういう点において、きょうこいうことをいったらよかろうと思うんじゃないかね。ある人がこいうふうに書いたわけ。こいうふうに書いたのが、これ杉亨二あたりがこんな字(寸多智智)を書いて喜んでおるわけ。一寸刻みにたくさんのことを知すすれば、久しく知ることができる、常例である。時間がたってもいつも決まっておる、こいうような言い方をしておるのに対し

て、財部先生が「統計落穂拾集」という中に「衆多知須知愚法」と、こう書いてある。かなで読むとスタチスチークじゃけれども、これを読むと「多知をたつとぶとすれば、すべからくみずからの愚を知るべし」こういう。だから、統計調査して人にものを伺うときには、私はこういうことがわからぬのですが、どうぞ教えてくださいということという、ああ教えてやろうと、こうなるわけよ。

だから、分を知ることが賢くなるゆえんよ。これに対して「寸多智度」という場合は、数学やっておれば、賢者の学で、相手が何をいってもどろを吐かしてみせるぞという立場をとるわけ。

それで、私が財部さんのこの言葉を利用していうときには、若い者が勉強しようとするれば多く知る必要がある、知識というのを知恵といおうとどういふことをいおうと構わぬけれども、自分はそのどこがわからぬか、どこをわかりたいかということを知ることが必要であるという態度をとればよろしい。

賢者の立場をとる場合には、わしは統計とはどんなものかということをおわかっておるけれども、おまえいうてみい、そしていわせてみたら、「ああそうか」、こういっておるわけ。自分がわかったことをいえばいいんだね。わからぬことをいうてもいけない。

それから人に説明するときには、私ほどわかった者はおらぬという意味にもなるわけだけれども、調査者と被調査者が対等で私はここまでわかるんですが、あなたにものを聞きますがどうでしょうかというふうにならぬと困るわけ。



だから、財部さんがいつもいっておられたときに、職業を与える方と職業を求めるやつと、差があったら職業を紹介できぬ。寸多智恵という立場の人は、みずからを賢しとするわけよ。だから何でも聞いてどろを吐かしてやろうとか、おまえこれだけのことしか知らぬのかというふうになる。

ある時代には、国勢調査を通じて日本の国のためになることがわかりたいというふうな謙遜な気持ちがあったんだけれども、だんだんには、現実の調査に対する謙遜な気持ちをなくして、こうわかると、こういうふうなことになるっておるんじゃないかと思ったりする。それで一足飛びしてああいう言葉の遊戯なり、言葉でわかたりすることは、非常に危険なんです。

それと、国際統計年とかいうので、ぼくが一番きらいなのは、先進国と中進国と後進国、後進国というかわりに開発途上国、“Developing country” こんな言葉がある。“Developing country” というのはいい言葉よね。だけど、先進国というものは、もう過去において発達したもので、もう発達がとまっておる国のことよ。

わしら学生に講義するときに、皆さんこそこれから大いにdevelopingな若い者だ、わしらはもう過去において発達は完了した“Developed country”で、もう新しいものは出てこぬじゃないか、こういっとるわけ。やっぱり、先進国でもない、後進国でもないということになれば、中進国というものができる。ここに国際の人口論において、そういう国別の発達段階説ということが問題になるわけ。

そのことにおいてぼくが思うのは、大学院時代に恩師

が亡くなられて、高等商業や何とかの講師になるとか、いわゆる職業につかなかった時代に、ある人が、私に多少研究させてやろうと思って、インドの人口問題調査というふうなことをいわれたので、インドの文献を調べて、インドの人口問題ということについて研究報告して、文部省の科学研究として出してもらったこともあるし、それから、戦争最中に「中国の産児制限と人口問題」という支那語の本を、ある人に翻訳してもらって、それを解説して徐々に出すというところまでこぎつけたのがあったけれども、その原稿は京都大学へ預けたまま発表しておりません。

反ばすながら、いまの後進国といわれておるインドとか支那の人口問題はどうかということを考えておるので、現実の出生統計とか出生性比とか、それからソビエトについても同様だけれども、そういう議論がどう理解されるかということとは暇があれば考えよう。具体的には、昔の台湾の人口をもって中国の人口なり、そういうものを推定したらというような思いがあるわけですね。現実には、中国の人口問題ということについては、非常に厳しい。夫婦2人が2人以上の子供を産むと、親の失業問題が起こってきたり、「子なきは去る」とか、文字どおりきついことをいっておる。そういう国がよくもあままで徹底的に産児制限なりを踏み切ったと思う。これが本当にそうなのか、たてまえなのかということが問題になるから、私ら中国へ行ったら、そういうことを調べてみたらどうだろうかと思ったりする。

これから4億の民があるといわれた時代に、中国人口を問題にされたり、それからマルサスの「人口論」にお

いて、中国の人口はどういうふうになっておるかという議論も出てくるわね。だから、そういう意味では、農業国なんかとして、支那の人口というものが、マルサスの人口論の問題にもなっておるし、そしてあんたと関連するからいうけれども、禁酒問題が出てくるわね。

米をつぶして酒にするよりは、これを人間に食わした方がよっぽど人口にプラスになる、こういう考え方をする人が一部にあるけれども、いざというときには、米をつぶして酒にするよりは食うこともできる。だけど、平生から酒につくらずにおくと、米の生産性が落ちてしまう。だから、いざというときには、酒にせずと米で食うこともできるという意味で、食糧問題をおおらかにいうとられるわね。

そういう論法をもってすれば、先ほど出たたばこの問題でも同様なわけよ。いざというときにたばこをやめれば、それだけ節約できるけれども、初めからたばこをやめておいたら、どうもならぬことにもなるし、それは別に、たばこ賛成論でもありませんがね。

そういう意味で、死亡率の改善に重きを置くために、結局生まれさえしなければよろしいという議論にまでいくことはダメだ。そういう意味で、出生率と死亡率との相関関係なり相乗関係というものは、依然としてあるものだ。古くは学説としては、死亡率が出生率を規定するという「人口動態平行論」が行われておったわけよ。私は因果関係として、むしろ出生率というものが死亡率に影響を持つとるんだ、だから出生数が死亡数よりも多いという力はむだだけれども、むだしなければ出生増加があまり望めなかった未開、野蛮時代というものがあつた。

そういう意味で、先ほどの「生れよ繁殖よ地に充滿よ」とか、ベルチオンのポピュラチオニステークというニとは、やっぱり人口の繁殖ということが前提になっているわけ。繁殖しようと思ってもマイナスの死亡があるために、思うように繁殖しない。しかし、死亡の網をかいくぐって、地球上に満ち満ちてほしいという希望の言葉、たてまえよ。そういう意味ですれば、結局人口増殖論者というか、それに属するわけよ。

そういうことをいうと、すぐ人口増殖がチェックというか、刺激剤になって、戦争を惹起するから軍国主義だというふうにいわれるわけよ。だけど、何をもって軍国主義とするかという問題になってくるわけで、時代の反映ということになれば、ジューズミルヒのように、戦争の従軍牧師としてやっておれば、フリードリヒ大帝のもとにあれば依然として人口膨張主義というふうにとられる傾向がある。

だけど、最初のころ書いた議論からすれば、戦時中はい「古事記」をかじってやれば、死亡する方の1000匹を殺すという人があれば、私は1500匹子供を産みましようという議論になってくる。現実の人口においては、1000分の15生まれて1000分の6死ぬようになっておっても、そういう世代を考案するという意味では、あまりふえてない現状になっていきますということが判断できるわけよ。

それを無理やりに、出生イコール死亡という安定人口に持っていこうとしたりすることは、封鎖することになる。でもマルサスを、私が理解しておる限りにおいては、出生増加ということが刺激剤になって、いろんな経済的な発展なり改良がなされておる。

それが減りさえすればすべて解決というふうな迷信が現にはびこっておるから、ことしの夏でしたか、厚生省のこういう発表があったときに、ある男がこういっていったわけよね。「日本の人口は1億2000万もなく、5000万人ぐらいが適当である。それが適当人口だと思われる。もし、人口増加なかりせば、地価が安くなって十分に住むことができるでしょう」というようなことを、新聞の投書に書いておる。地価問題にひっかけてね。

そういうことは現実には農村、僻地で何ぼでもあるわけよ。土地がただ同様に、北海道のクマが出るところなんか何坪買ったってしょうがないわけよね。しかし、年々地価が上がってきておる。だから、マルサスの「人口論」を拝見して、リカルドの「地代政策」なりいろいろなものが出てきておるわけよ。

内海 先ほどの中国の米の場合ですが、米を酒に変えるといけなからといった場合に、酒をつくらないことになる場合には米の生産が非常に落ちるでしょう。

青盛 本当に食糧に困ったら、米を食糧に回したらよろしいわけよ。だから、経済全体の発展を総合的に考えるべきであって、片方抑えれば片方へいくというようなもんじゃないんだという議論が、マルサスの「人口論」の中に出てくる。

内海 そのとき禁酒ということ英語でいうと“Temperance movement”といって、決してアンチ(Anti)アルコールではないんですね。日本語では禁という字を使いましたがけれども、まあ適度にやるというような意味なんですね。理性でコントロールして、適度にやればいいんだ。

青盛 だから、産児制限についても、モラルチェック（道徳的抑制）をしておるね。物理的に、あなたのここを封鎖してますかとか、断種してありますかとかは言ってないわけ。ただ、モラルコントロールとか、セルフコントロールとか、自己責任の問題になっている。

それから、ハンセンあたりにも出ておるけれども、どういう夫婦が結婚できて、どういう夫婦ができなくて、どういう夫婦が子供を持つことができるかできないかということというわけね。形式的にチェック、統制することではないわけ。内側にモラルがあってやることよね。モラルとか倫理とかを外形的に他へ押しつけたってダメなんじゃね。

内海 先生、台湾に行かれましたか、いつか。

青盛 台湾、行きました。

内海 昭和何年？

青盛 昭和4（1929）年の4月から5月、1月ほど台湾へ行って、台北の官舎を出て阿里山のところから能高山を越えて花蓮港へ出て、それから東海岸をこっちへ戻ってきた。

そうしたら、その翌年に霧社蕃の事件が起こって、霧社の蕃人が殺されました。霧社の蕃人の子供というものは素直なものです。わしらに対しても「おはようございます」といって、日本人になつておった。霧社蕃事件であれを皆殺しにしてしまったわけね。あれは惜しいことをしたもんじゃないと思う。霧社蕃事件というのがあった。

先ほどいった、北海道の函館からの話は「統計学研究」

の中にちらっと書いとるけれども、いつも数字は出ておらぬ。これを私が講義したときに、時事問題が、そういう説明の中にちらっと出ておるんです。だから、北海道庁の統計課長あたりも、2〜3名も、あの船に乗って死んでしまった。

この同じときに3人ほど北陸の方の青年が、こういう船に乗ったたら死ぬかしらぬと思って、船を降りようとしたわけよ。船に乗った以上、船長なり船員のいうことを聞けと行って、個人として降ろさなかった。それでは3等船室からと行って、個人として降りようとしたらダメだということから、団体交渉するからおまえら行こうと行って、3人ほどで行って交渉したら、降ろしたわけよ。3名降ろした後で、3名の統計課長や何か、東京へ行かにゃならぬからと行って乗ってきた。そうしたら、1578名の中から3名引いて3名プラス。ほとんど死んだわけよね。

内海 その船は沈んだわけですか。

青盛 洞爺丸は沈んだ。

内海 ああ、洞爺丸ですか。

青盛 洞爺丸事件のことを「社会統計学研究」の「統計教育の課題について」というところで、ドクター・ライスとデドリックとの日本の統計制度の近代化という問題を扱ったときに、12ページに書いておるんじゃない。

「例年二百二十日前後における台風の予測について、気象台当事者の努力にも拘わらず、往々にして時空の広範囲にわたる統計資料の総合的判断と速報との適確性にミスエイク（誤謬）を反覆することは少なくはない。当時は南方や北方の洋上における定点観測船、常備飛行機お

よび経常予算の不足とかこのことがあったのは争当であるにしても、中には電子計算機がないことを予測不能の原因視する技師がいた事実は、些か可笑しいのではあるまいか。年々歳々の数多い経験と時々刻々の状況の変化を、如何に総合し判断すべきかの能力を欠如せることは、掩いかくせない。レーダーを具備せる国鉄青函連絡船洞爺丸事件が教えるものを反省する必要はないであらうかというふうにして、その当時は事実を知ってるから、1500何人のうちで、3名が降りて3名が乗って、死亡者の数には変わりないけれども、計算機回して船が沈むのがわかるかでなしに、13号台風が来とって危いから降ろせぐらいのことはいってもよからう。その当時は、まだ計算機が発達していなかったけれども、レーダーがなければ行けぬのかと行って、ここでも将来の予測はおかしいということをしつとる。

ただ、財部さんが、同時に予測するためにもうを見ろんだという予測は、そう10年、20年先のことでないわけよ。現実の行動の予測であってね。

内海 降りたる人の人というのは、もう直観的にわかっていたんですね。

青盛 直観的にわかったわけよ。あなたの本にもありますが、ああいうところね。

内海 台湾の霧社蕃人が殺されたというのはどういうことだったんですか。

青盛 どういうか、まあ霧社蕃の政治、台湾の政治に対する反省というか、どういう原因がよく調べてみたらいけれども、結局、霧社蕃の女を、たとえばの話でいっちゃ悪いけれども、日本人が犯したのを、けしからぬと



いってその人をたたき殺したとしますね。そんなこととしてというので、蛮人を討伐して全滅させたような事件があるわけよ。

だから台湾の行政は非常にうまくいっているわけだけれども、唯一の欠点が霧社蕃事件だ。

この前、祭歌祭で台北高等学校の人が台湾の蕃人になって、裸踊りやったりしたから、私は霧社蕃事件の前にあそへ行ったんだ。だから、台湾の蕃人の踊りを台北高等学校の人がまねるのはいいけれども、霧社蕃がどうだったかということを知っておるんだという話をしたわけよ。そういうふうな、それこそ少数事例が、針の穴から天をのぞくということになったり、透徹して見ると、ざんげということになるわけよ。

内海 矢内原先生は、新渡戸先生が植民政策の講義のときにこの話をして、いつも温厚な新渡戸縮造先生が非常に憤慨して講義したのが印象に残っているそうですね。この事件のときに、相当怒ったということですよ。兵隊さんが討伐した話でしょう。それをして島民を殺したというので非常に憤慨して講義をしたという話があったんですよ。非常に温厚な先生ですけどもね。この事件については-----。

青盛 私もそういうことだと思うんだ。

私と一緒に訪ねていったのは、いとこの人で、台湾の総督府の警察関係におったから、警察関係をたどって、旅行して派出所に寄るたびにお茶を飲ましてもらった。のどが渇くからお茶ばかり飲んでおると、お茶の成分が頭に上って、夜じゅう眠られなかったことがある。それでとうとうお茶を飲むかわりに高い山の清水を飲んだ。

あの清水でマラリヤにならぬでよかったけれどもね。

それと、いいそびれたけれども、山本美穂乃という人がクリスチャンで植民政策というものをやって、そして、植民政策をなくするのが植民政策の理想だというような講義をしておられたわね。その人は、蜷川虎三さんの先生でもあるし、それから「魚食論」といって、漁業なり、そういうことを財部さんが論じておられる。それと蜷川さんの水産経済を入れた「農村経済」というものも関連しておったし、それから、戦時中の人口問題というものは、満州国へ行くことが人口の発展であること、それから北進論があれば南進論があったりして、それは戦争政策的な人口論も非常に多かった。

だけれども、財部先生がいわれるのには、南進論、北進論も結構だけれども、「忘れずらめや富士の高嶺を」といっておられる。そういう理論であるのと、私がたまたま移民をやっておるために、ハワイ移民というもののことを考えて、それから明治の末年に、日本の天皇の御孫をあの國王が婿にもらえば、あそこは日本領になっておったかもわからぬという歴史があるわけよ。そういう意味からすれば南進論のかわりに、ハワイを占領して、ハワイを日本の国土にして手を打てば、あの方がよっぽどいいじゃないかということというたこともある。

けれども、政策と絡むと、純粹というか、まじめな人口論ができぬ。マルサスの移住自由でやっておる場合と、ハンセンの移住自由の原則を前提にして、一国の人口の榮えは都市人口及び都市文化の榮えにある、その文化の中心になっておるものは、そういう人の文化性であるという議論よ。だけど、あまり戦争が激しくなると都市に

入ってくると、都市人口はどんどん破滅する。その破滅をどうやって証明するかという議論になってくる。

これはアイヌや少数民族の破滅と同じように、純粋の都市人口というものがそう簡単に破滅するわけじゃない。水が入れかわるように順々にかわっていく。けれども、25年を1世代とすれば、3世代ということは、75年たてば全部都市人口が郊外の田舎人口と入れかわったも同様になるという議論を展開したわけよ。そうすれば結果としての都市文化が残る。

これを財部さんの書いた序文によれば、「売豪と唐様で書くる代目」ということになる。3代目は豪を失うかもしれないけれども、その人の書く書は、支那風の唐様の書としての文化が残るという考え方。これを応用すればアメリカへ移民に行って、戻ってくる。行って戻ってきたただけなら何も無いけど、移住して得られた教養なり文化や生産力というものを応用すれば、たとえばいえば、広島における東洋工業というものは、アメリカ移民が持って戻った技術の産物であるわけよ。それが現在においてフォードと提携したり何やらと提携したりする時代が来たりしておるわけよ。

内海 アメリカに移民で行っておったわけですか。

青盛 移民から戻った人が国内で奮発して、そういう事業を興したわけよ。そうすると、日本で居心地がよくなかったものは、一つも中身がよくなっていないわけだけれども、当時読んだ文献によれば、移住者精神というものが人間を奮発させるわけよ。同じ人が同じところに住んでおったのでは、一つも賢くならぬ。

ただ、移住の趣旨、発祥からいえば、村の中の上流階

級はもちろん行かぬ。中の上も行かぬ。下流階級、下の下は農奴で出られぬわけよ。中の下か、下の上の人が移民に行く。そしてその先努力して、りっぱになってくる。中には、成功せず「ダメ」になってしまう人もおるわけ。そういうふうに移民の精神をとっておる。

それが国策として外国へ行って人口問題を解決したりなんかしておるように見えるけれども、ことに送金がいやがっておる。それは親子ぐるみで行っておるんなら送金せぬでもいいけれども、親や子供を残しておる限り、送金せざるを得ないわけ。けれども、それを通じて、カナダやハワイと日本との交流。それから、明治41年に早真結婚の禁止とかいろいろなことがあったために、村じゅう移民に転向したりした。

最後に移民が停止になったのは、大正5年ぐらいの早真結婚の禁止か、紳士条約みたいなことで行けなくなったわけよ。けれども、トラは死して皮を残すように、移民もそういうよい面もあるし、極端に言えば棄民になった、民族を捨てた時代もあるわけよ。

内海 向こうに行って、もう帰らないわけですか。

青盛 帰れないか、あっちでつぶれてしまうわけ。

だから移民政策において、先ほどのような新渡戸稲造と、その弟子の大河原何とかいう人が「移民論」という本を書いておる。当時の移民問題みたいなことで戸田海市氏が論文を書いたりしておるし、当時の先生は非常に時事問題というものを尊重して、そういう時事問題についての論文を書ける人が多かったわけよ。

これは戦後、高等学校教育の名残りとして残って、政治経済という一般社会に対して「時事問題」というもの

があって、これが軸になって、歴史とか地理とかいう科目をコントロールするいい科目になっておった。それが、いつの間にやら時事問題が消えてしまって「政治経済」になって、そして単位づけが4単位が2単位となったために、社会問題は日本史と世界史というふうにして、私らの考える人文、社会、自然の3系列がうまく溶け合うという点がなくなった。ことに、時事問題をなくして歴史問題に振りかえて、統計教育する場合にも、統計教育には歴史は出てこないわけだ。

もう一つ、統計教育についていえば、最近聞いたことだけれども、学生紛争のときの学生から幾何という科目が必須でなくなって、代数の中に吸収されたわけよ。そこで、多くの数学の先生は抽象的な代数のみ講義している。幾何を説明しないから、グラフのこともわからぬようになれば、その人の議論しておるものの座標がわからぬようになる。そうすると一面的に、大学の先生はけしからぬと行ってつるし上げてやっつけてしまうようになって、自分は何を行っておるのかということの位置づけができぬようになったという解説をする人があるから、この前、数学やって統計やっておる人に聞いたら、そうなんじゃというった。

だから、グラフ教育で一番問題になるのは、グラフと表といたりしているけれども、統計表があって、グラフができる。それがグラフのみが先行しておるように考えるわけ。それで私ら、いま、猪間驥一さん流の統計図表からすれば、ヒストグラムとヒストグラフと2通りあるわけよ。だから、絵グラフでないヒストグラムというものは「柱列矩形図」と、私ら訳しておる。いまごろは、

柱列図というか、柱形図というふうにいっておる。これに対して棒図のことを「棒グラフ」というておる。

この前、うちの孫に、「棒グラフと柱形図とどう違うか」といったら、「棒は非連続である、しかし柱形図は連続しておる」という。それはそのとおりよ。

そしてグラフで問題になることは、「折れ線グラフ」、あんなしょうもない言葉使ってもらうと困るよ。「折線図」よ。

内海 ヒストグラムというのはわかるんですが、ヒストグラフというのは曲線になるわけですか。

青盛 曲線になった場合をグラフという。だから、フリーエンスリー・カーブのことをグラフといたり、何とかいう。

言葉のやり方はどうでもいいけど、数学におけるグラフというものは、統計図表を写した統計図ではない。点線と点線を結びつけておるだけで、面積図表になっていないものをグラフというおそれがある。ことに時系列において時間が違うということは、一つも続いておるわけじゃないわね。時間の連続ではなくて、統計にとられた内容の連続ということが問題にならなければいけない。

内海 幾何がなくなったというのは、どういうわけなんでしょうかね。

青盛 それは数学の先生というものが、昔は幾何の先生もあり、代数の先生もありして、それぞれ何時間とか単位づけができておったけれども、数学のうちで一番偉い先生は代数の先生であるというふうにして、関数関係のみに抽象して議論をするようになってきた。だから私らとしては、当然幾何もわかっておるものと思っておるけ

れども、いつの間にやら、教育体系においてそういうものが崩されつつあるわけよ。

ことにおもしろいのは、入学試験のときにはわざわざ「統計及び確率は入学試験から除く」という言い方をしておったわけよ。「除く」ということは、大学に入ってからしっかりやるということかどうか。除いておきながら、統計学の主要な問題は確率であるが、統計学は応用数学なのか、数学も使うけど、中身のある集団としてのものを問題にするのかという問題が出てくるわけ。

そうばらばらいっておるんじゃないから、こういうことは問題にしたいと思って、新聞の切り抜きをこういうふう印刷してきておるんですがね。ことし(1980年)の11月1日現在で、日本の米の作付面積と収穫予想量が9761万トンになったという統計的事実をいう。これが例年の88%ということとは9141万トンか、私のテキストでも何万トンという生産量がある。作付面積も減反減反で減らしておるわけよ。それを作付面積で割れば10ヘクタール当たりの収穫量、全国平均の415キログラムがとれる。ということは、収穫予想量を作付面積で割ったわけ。しかし、その収穫予想量というものは、各都道府県別の作柄というものを聞いて、そして作付面積に掛けたものになる。その収穫予想量を作付面積で割ったものが全国の都道府県別の10ヘクタール当たりの収穫量ということになっておるわけよ。

それから、作況指数の対平年比ということとは、昔から、過去7年間のうちで、よくとれた年と不作の年を除いて、5年間の平均をとっておる。そうすると88%になる。だけど、全国の統計が意味があるように見えておるけど、

実は、各都道府県の生産量を集計して初めて全国ができておるわけよ。そして3通りの系列のうちで、「水稻の作柄」を「平年並み」と「やや不良」と「不良」と「著しい不良」の4分法で分けておるけれども、私は今度のみやげ話にしようと思って、ここに3通りの度数分布をつくってみたわけよ。だから、こういうふうなことをするのは「初めに平均あり」ではなくて、全体の地方別の作柄がどうあるかということが問題なんですよ。だから3通りの度数分布に求めたのがこういうことになっておるわけよ。

まず3番目の、各都道府県別の「予想収穫量」というものの絶対数の分布を見るために、「700万以上」、「600万以上」、「500万以上」、そして「200万以上」、「100万以下」に分けると（A表参照）驚くなかれ、「100万以下」の県が32で、その次が200万トン以上が20、こういうふうに逆分布で、最下数が多いわけ。一番多いのは1万700何ぼになる。秋田県が626とか、県の名前が出てくるわけね。だから、こういう分布は丁字型分布で、平均とっちゃいけないわけよ。最大多数は100万トン以下の数が多い数を占めておるわけよ。 [表は最終ページ]

それから次の系列は、10ヘクタール当たりの平均収穫量というものを度数分布にとると、これは380ぐらいを平均分布として、どうやら47都道府県がノルマル分布になっておる。しかし、前年に対する作柄というものとすると、100%に近いところが4、97%のものが12というふうにしてここに山があるのと、それから、平均の88%のところには3ぐらいしかない。そしてこういう分布（B表）になっておる。ということは、この分布は、作柄



が100%に近いところが最大の山になっておる、しかし、全体の平均としては88%というふうにあらわれておるわけよ。

その3通りの分布を、私が若いときの得意とする相関座標に組み込んだものがある。それは府県別の絶対数を横にとって、そして取れ高を縦にとると、逆相関といいますか、真ん中の方へごちゃごちゃと都道府県が並ぶわけよ。しかしおもしろいことは、沖縄、青森、岩手、北海道、こういうふうにとれるところは作柄の100%取れても、日本全国の米の生産に1つもプラスにならない。

(C図参照)相関係数がこうなっておるということで、相関図で見ると、個別の県については、沖縄や鹿児島が100%取れても、作柄がよくても、全体の取れ高の平均に影響してこぬということがわかってくる。

だから絶対数だけではいけないけれども、絶対数に逆比例して、たくさんとれるところは絶対量も多いし、平均収穫高も多い。少なくしかとれぬところは、100%豊作であっても知れたものだということになる。事ほどさように各地域が分業というか、分裂しておるんだということがわかる。

これは全国平均の取れ高を何ぼいらってもわからぬ。地域の特殊性なり悩みというものがそこにも出ておるというふうには、ここの経済統計で学生にいうてやろうかと思うし、この作柄指数というものが平年に対して何%ですかということも、実は怪しいのではあるけれども、個別の県の個々の相関係数をとってみると、3通りの組み合わせがあるが、絶対量だけの問題と少ないところとそういうことが問題になる。だから、理論的には単純平

均が正しい。しかし単純平均でなしに、ウェーテッド・アベレージにせにゃいかぬわけよ。だから、10ヘクタール当たりとか、前年に対する作況とか、こういうものはウェートがないでしょう。そこが問題になる。ウェートなしに問題にすると、鳥取とか鹿児島とかいうところがぼろくそに出てくる。

内海 ウェートをつけるとすれば、どういうふうにつければいいわけですか。

青盛 作柄にしても、この10アール当たり収量にしても、量がウェートになる。量がウェートになれば全国平均がで上がる。けれども、個別の府県にとっては全国平均が何ぼであろうとも、沖縄のように南の方でもあるし、耕地としては使わず、サトウキビを植えておったところに米を植えてもダメなんだね。あなたのところあたりでも、休耕してしまうと二度と米は取れなくなる。取れなくても、アメリカのように小麦にしたらよろしい。しかし、小麦と自動車とバーターできるかという経済統計の問題が出てくる。

だから、私としては経済統計を題目としたけど、具体的な指標が得がたいし、人口統計なら何とかなると思っておったんだけど、人口統計ですら昭和13年(1938年)から発表禁止ということになって、回復したときには、動態統計は厚生省の患者の使用範囲になってしまっておった。それでもいいけれども、統計には興味があるというので、昭和26年(1951年)あたりの動態統計で男女別の平均体重の分布が得られたから、そして順序別というものがあつたから、第1児から第5児、第6児に至るまで、平均体重がどうなっておるかということとを調べ

たら、第1児、2児は体重が少なく、3番目、4番目が重たくて、5番目、6番目になるに従って軽くなった。

そのことから、1ダース子供を産めば軽くなる。長男、長女のみでも軽くなる。真ん中の子供が生まれてくれば体重もふえるという議論ができるわけ。

その当時は出産順序数も、わりあい5〜6番目まであったけれども、その後、最初の子供が半分以上になったりしてある。

そういう研究や男女別の研究も、53年(1978年)の統計がことし発表になるし、54年(1979年)の統計あたりは、男女突っ込みの資料です。

それから国勢調査についても、あの表のしまいに多少述べておいたけれども、年々講習会のときにはあれと同じような資料で講義して説明したり、いま、学術用語の定義として、私が地方におる間に、中央においてはそういう定義がそういうふうに変わってきている。動態人口はそうまで違わぬけれども、静止人口の定義が、これとこれが私のに載っているのと違ってきている。どこへこういう議論を登記しておけばそれが定説になるのかということがわからない。

被爆人口についても同様に、そういう情報管理というか、情報の訂正ということはどこでもなされていない。次々にたくさんの統計資料が出てきて、質的なコントロールはどこでもなされていない。目的のために、政策的に多分に統計資料が使われているという議論になる。

現実の国勢調査をどうすべきかという問題で、過去から長い間、「氏名及び男女の別」、これには異議はない。「世帯主との続き柄」、この続き柄の長男、長女というのがそ

のまま出生順序数になって、動態統計で続けられておるといふことは事実よ。

それから次の「出生の年月」、これも満年齢を求めるために必要な項目ということばかりわかる。それから「配偶者の有無」の「未婚」「有配偶」「死別」「離別」、文句いい出したら、いまごろは「死別」や「離別」というのはけしからぬという人もある。「国籍」も一応やむを得ぬけれども、次の問題が「現住居に入居した時期」。このときに、「出生時から」という項目があるにかかわらず、「出生時」から「どこに生まれたか」という項目を落としたことも意味があるんだろうけれども、せっかく昭和50年(1975年)の9月までを記録させながら、どこから来たかということを書かさぬというのはどうもおかしいと思う。50年(1975年)から54年(1979年)の9月、最近1年間と残りの5年間、これはいい。

「前住地」、こういうふうになっておるけど、結局、移住というものは動態統計でなければ調べられぬわけ。静态統計で調べるのは、その間に直接来たもので、途中で出たり入ったりしたことは一切無視しておる。だから間接法であって、動態統計そのままじゃないということがわからぬと困るわけよ。何年からといっても、途中で出たり入ったりする人があるから、静态調査から動態を探るということは間接な手段であって、直接な手段ではないということがいえるわけ。だから、年齢を聞くことはいいことだけれども、住居した時期、だから移住統計について幾分苦勞しておる者にとっては、移住というものは戸籍では不十分であるから、国勢調査でやったんでしようけれども、5年前、10年前、6項と7項の結びつき

がどうも不徹底だという感じがする。

それから8の「教育」の点については、「在学中」と「卒業」と「未就学」、これはいいけれども、こんなにまで学歴を聞く必要はないと思うんだ。静態統計としてこんなことが必要なのかどうか。これは教育統計、学校調査によって動態ならでできることであって、それは私ら昔の大学院に行っておるから、侮辱されておるとは思わぬけれども、学校統計でわかることを、こんなに念を入れて聞くことはおかしいということ。こういう点は簡略にした方がよからう。

それから「1週間に仕事をしましたか」という点。「従業地又は通学地」、これも昼間人口を調べるために必要なんだ。「交通手段」、これもちよっと、そうまでしてやる必要はなかろうと思うがね。国鉄再建のために役立つのかどうか。(笑)「勤めか自営かの別」「勤め先・業主などの名称及び事業の種類」「本人の仕事の種類」、そこまではいままであつたんだからいいけど、「家計の収入の種類」、これもちよっと要らぬと思う。「種類」をいったってしようもない。

「住居の種類」、住居が持ち家であるかどうか、これは、住居統計、世界住居統計週間とかなんとか、そういうことで必要なんでしようが、それから「居住室数」、何室か。最後の「畳数」というのが、どうもやっぱり時代おくれだと思うがね。「3.3平方メートル(1坪)を2畳に換算して」なんて。

それから「従業地又は通学地」、「居住室の畳数」。いろんなことを統計とるんですが、最後の「畳数」について個人的なことをいうと、きょうでも来てもらったらわか

るけれども、私の家の下の畳と上の畳との畳を4～5年  
 ぶりでかえた。そしたら、ことしは湿気が多かったから、  
 もっと湿気で傷んでおるかと思ったら、たんすや重たい  
 もののないところはあげて干してあるから、そう腐って  
 ないわけよ。いまは年に1度の大掃除で畳も上げないし、  
 万年床で敷きっ放しになっておるから、1階の畳やなに  
 かみんな腐ってしまっておる。それで使いものにならぬ  
 わけよ。したがって、畳屋も商売が十分できぬわけ。だ  
 から、かえる必要があつたら、いつでもいうてもらった  
 らすぐ来ますといっておる。

その人のおやじに畳を入れてもらって、18年来、とき  
 どきかえているわけよ。おやじはもう74にもなるから、  
 だんだん体が弱くなっておるけど、おやじには勘定を任  
 しておるんだ。「間尺に合わぬけれども、おやじに勘定さ  
 しておかぬとぼけてしまうから、親孝行でやっておるん  
 です」というから、「おまえは親孝行でいいことやってお  
 るな」「使用人使っておるのか」といったら、「これは弟で  
 す」という。息子と弟がやっておるから、細々とでもや  
 っていけるわけよ。大企業のようにやっておると畳のし  
 んのわらはないし、とてもじゃないけど商売にならぬわ  
 けよ。そういうのでやっていますという話。だから、た  
 まに畳を使う者は便利だと思ふけれども、普通の生活で  
 は大掃除もしないし、畳というものは日本人から訣別し  
 てしまっておるという現状になっておるわけよ。だから、  
 世の中の変化に応じて、いろんなことがあるということ  
 をつくづく思うた。

それで、きょうの話の結論として1つ歌を詠むと、こ  
 としの3月あたりに、お祈りする人がやってきて、祝

詞のようなのを述べたり、すらすらっと歌を詠む。広島まで来て私の頭の洗淨をして、祈れば何でもできるという触手療法の先生が、いろんな歌を詠んだり、「私が話をする文をノートしたりしてはいけません、聞いて直接わかってください」というから聞いておったわけよ。

その人は、東京から飛行機でやってくるわけ。そうすると、飛行機は新幹線で来るよりも1時間早いという歌を詠んだわけよ。すらすらっとろっ々つ詠んだ歌の中に1つ出てきたから、「あなたは、こうやって5つも6つもすらすらっと歌を詠まれるけど、私は清水比庵という、京都大学の法学部を出て裁判官をしておって、日光町長をしていた人が興した短歌会に十何年前から入会をして、最近、毎月5つ6つの歌を四苦八苦して詠んでおるのに、あなたはすらすらっと詠まれる。私が詠んで出したけど没になった歌をひとつ先生、批評してください」といったら、「没になった歌じゃない、入選したいいい歌を詠め」。「いや、私でも10年歌を詠んでいると、どういう歌が当選する、どういう歌が落選するということはわかるけれども、落選した例を申し上げるんですよ」「では、いうてみい」といって、ノートするなといわれておったけれども、ほかの人にわかりやすいように、黒板に「わが家の孫11人の祖父祖母は10人5家族にして不増不減なり」と書いたわけよ。

息子が4人でそれぞれ結婚しておれば、4組の親が8人おる。私ら加えて10人の親がおる。10人5家族から11人の孫が生まれたんだから、1人ふえたといえどふえたけど、これがはたち以上になって結婚してしまうまで生き残ってくれるとよいがと思って、私らの世代の看が死

ぬということば予期してなかったわけよ。

そうしたところが、ことしの5月に、私の長女の義父さんが77で急に亡くなられた。おじいさん、おばあさんの方が先に死ぬということば考えていなかった。孫が成長するまで、育てばよいがと思ったけど、いまにして考えれば、9人が11人になっておるわけよ。そういう意味では、そうふえたり減ったりしたわけでもない。お祈りして人の病気を治すことができるかということよ。

私ら、こうやって祈っておると、上から手をやってみると、熱い光が出てくる。熱いものが感じられる。私は、そうだなと思って黙っておった。そして、あと考えてみると、目をあけてみたら、上から懐中電燈か何かでエネルギーを出しておるわけよ。これを祈っておるかのようには思うておるわけ。だから、人の病気を治そうとして内のエネルギーを出すことも、向こうから病気が伝わってくることも1つだ。相手のために自分の命を縮めて助けてあげたい、病気がこっちにうつっても構わぬという関係においてはよろしいけれども、だから、金を出して人の病気を祈ったりなんかする。こういうことをいうと内海君にしかられるかもしれないけれども、私はそういう議論をかけたりして、そういうときに本当に心に思うことを歌に詠むのはよろしいけれども、やたらにうそをいったり、たてまえを述べたり、宣伝するみたいな言葉があると、何といやらしいというふうに思ったりするわけよ。

そのことで昔の財部先生の思い出を述べれば、財部先生が私の心をほぐしてやろうと思って学校へ残ったついでに、夜、飲み屋へ連れて行って一杯飲ましてくれたりして、私が送っていかにかならぬのを、私の家までわざわざ



わざと送ってくれたりしたことがある。だけれども、先生が危ないと思って、また私がついていくというふうにしたことがある。

そのときに、ラジオか何か聞いておってつくづくいわれたことは、夏川静江とか、ああいう女の俳優が本を読んだりしてラジオ放送しておるときに、何とあさましいことをいうもんだというように批評しておられた。そういう意味じゃラジオざらい。いまでいうとテレビざらいよ。

ほんとにそれがうつったわけじゃないけど、この前、日本統計学会が広島であって、原爆についての意見を述べたりしたときに、テレビのライトがついて、こうやるから、私は黙って、そういうことをいうてやっても、一つもこたえる人はおらぬわけね。そういう時代がとうとうやってきて、情報過多の時代になって、これほど統計情報がたくさん乱れ飛ぶ世の中になったけど、本当の知識というか、本当の知りたいことについてはあまり聞かされてないというような気がするという意見を持っておる。

現実には国勢調査について被害意識を出すと、そうでなくても調査がうまくできないときに、もっと自信を持ってやらにゃいけぬぞということで、統計課長に、いまの国勢調査に対する態度がへっぴり腰だからいけぬといったら、「何が、へっぴり腰だ」と憤慨しておっけど、やっぱり本当に知りたいことは堂々と聞かなければいけない。そうまで必要でないことは聞かぬようにした方が、もっと国勢調査がスムーズにできるんじゃないだろうか。

そのためには、昭和10年(1935年)ぐらいには高等小学校の教科書に「国勢調査とは」という定義が載ったり

しておったがね。それから、その当時の統計については、「統計を通じて社会的な調査をするんだ」という説明が載っておった。これは戦後になって、言葉の大辞典の京都大学の教授をしておった新村出氏の岩波の「広辞苑」がある。この人は、私が大学時代に新聞批評したりしたら、もっと達観してものをいわにゃいけぬというような態度だった。新村出の言葉の大辞典によれば、いつの間にか「自然的な単なる測定が統計である」というふうに定義が変わってきた。だから統計調査や、そういうものの統計学の定義の統計みたいなことじゃいけぬわけだけれども、しかし、どこかではやっぱりこれだけのことはやらにゃいけぬという反省があっただけでしかない。

高野岩三郎さんという人のおった統計学会のときには、東京であつたら必ず統計局を見学したり、統計局の資料を發表したり、そういうふうな意識の交流があつたわけね。それがいつの間にやら全然交流がなくなつてきて、そしてきのうも私あてに案内が来ておるので見たら、岡崎陽一という人が「人口統計学」という本を出しておられるのを見て、読んでみにゃわからぬけど、その構成内容を見ると、「人口学と人口統計」、これはそういうふうに定義する。「人口構造」「死亡」「生命表」「出生」「人口増加」、それから「人口モデルとその応用」もいいいけど、「全国人口の将来推計」というので将来人口の予測推計という項目があつて、「(数学的方法・経済学的方法・要因別推計法)」と出しておる。時代が変われば、やっぱりこんなのもてるのかなと思つておるわけだ。

私らの財部先生の言い方によれば、統計の議論を過解析、解析し過ぎちゃいけぬということ、全体としてどう

いうふうにとらえるかというふうな考え方が昔の人にはあったけど、いまの人は初めから宣伝というか、何かかきかかったようなものがあるように思えるんですよ。私らは統計をやっておれば、学校の先生になる以外には、それは各府県の統計課長くらいにはなれたかもしれないけど、ほかに何もできなかった。

青盛 話の順序として、原爆の災害についての私の意見を述べて、次に、選挙区の議員定数と人口問題という2つを述べたいと思うのです。

まず、原爆の広島に与えた影響については、昭和35年（1960年）の日本統計学会の会報に報告をしている「原爆の影響に関する人口の統計的研究」というものと、30年（1955年）9月の「統計の泉」に発表している「原爆の遺伝的影響に関する一研究」——これは「長崎、広島における妊娠後期における被爆影響の一説」というニールとシュールの論文の紹介を兼ねたものであります。

そして、最近、経済統計研究会で発表して、「統計学」の38号で出したのが、「広島・長崎の原爆災害」という岩波書店から出た本に対する私の批評であります。

いまは、主として書評としての「広島・長崎の原爆災害」というものの説明を、被害総人口という立場で、説明してみたいと思っております。

この書物は、広島、長崎の原爆災害誌委員会の編集であって、荒木、本島の両市長が序文を書いて、前広大学長飯島宗一、広島女子大学長今堀誠二、長崎大学長具島兼三郎を筆頭とする37名の執筆者が、共同研究で書いておるわけであります。

その中で、第Ⅲ部11章の「地域社会の崩壊」と書かれておる場所の、被爆人口と死亡者数における広島市と長崎市の統計的批判と吟味に、限定して述べておるわけがあります。

この執筆者の中の1人が、最近ある文献にこう書いておられます。「広島長崎の体験を有していながら、今日で

も37万人余りの原爆被爆者が生き証人として存在しているのに、日本政府は核兵器全面禁止に向けて先導的役割を演じてきたといえるのか。驚きあきれるその及び腰は、私たち国民の責任である。」

広島、長崎の原爆災害誌編集委員会の共同執筆者の中では、1950年10月1日現在の被爆者生存者の総数は28万3498人です。これは、それより10万人多い勘定になります。

この岩波から発行された本では、被爆直後から5年間たって、広島では20万人以上、長崎では、14万人以上の欠損となって、合計して34万人以上となる場合と、総合計いたしますと、被爆当時の両市の人口は72万人となり、当時の米穀配給登録人口の45万人に加え算をしておる被爆当時の両市の所在人口とされておる広島の32万7000人、長崎の28万6000人、合計61万3000人と比較すれば、なお11万人が過剰に評価されております。

「山より大きいイノシシは出ない」とのたとえ話を例にとれば、昭和25年(1950年)10月1日現在生存、死亡の総数のいずれにおいても、10万人ずつサバが読まれていることになります。

これが、私のいわゆる全体としての安定静止人口理論の構想下の人口論ということになります。だから、被爆総人口を考えたときに、総計20万人過剰にサバが読まれているということでもあります。このことは、被爆災害人口について、批評したとおりであります。

こう書いた同じ人が、被爆当時の広島の人口を、1世帯当たり5人と仮定して、1世帯が18坪の家に住んでおるとすれば、どれだけの家屋の損害になる。事業所が何

カ所あったと仮定すれば、これだけの損害になる。28年8月現在の建築資材の値上がりを52年まで取れば、何千倍になるというふうにして、数知れない被害がますますふえるとしておるとおりであります。

私が、経済統計の研究のもとにおいて、貨幣価値の変動と、通貨の発行数量とで研究をしておりますように、インフレによる物価騰貴というもので、急替相場や貨幣数量の増加とともに、増大するということであります。これは原爆の被害が、質的にひどいものであることを、いかにして量的に過大なものと宣伝しようとしておるかというふうに、私には思えてなりません。

私が子供のときに、ある人がおなかをこわして、おかゆを食べねばならなくなった。そうすると、女中さんがおかゆのもととしての米を一握り入れたわけであります。腹をこわした男の子も回復し出しでありますから、なるべくたくさん食べたいわけであります。「そんなに少しのお米なの」というと、女中がいわく、「お坊ちゃま、このお米はおかゆにすると何倍にもふくれ上がりますよ」。すると、その男の子は「1粒が何粒になるの？」といった笑い話があります。

これが原爆の影響に関する私の文献紹介であり、研究者の初歩としてする批評を、原爆の災害についての私の意見の最後としておる。

だから、昭和35年(1960年)から20年間、原爆についての研究を討論することをやめたのが、20年ぶりに出発点に戻ったわけであります。これは20年前までは、広島の実地調査なり、生存総人口を研究することで、たびたび議論を持ちかけたわけですが、政策といいます

か、イデオロギー論争が非常に盛んであったり、ことに困るのは、国勢調査において死んだ人の数を出せという間違った要求が繰り返されたことも、思い起こされます。

こういうことを「統計の泉」の11月号ぐらいに書くつもりで、原稿にしてあります。その題は「被爆総人口構想」というので、定住圏構想と同じように、構想倒れという皮肉をいっておるつもりなんです。

内海さんは被爆のときにおられたんだから、どういう意見を持っておられるか-----。

内海 私は向洋<sup>むかいやう</sup>にいたんです。日本製鋼所で学徒動員だったんです。そのときに爆弾が落ちて、初めのうちは何かわからなかったのですが、理科の人が、あれは原爆ではないかといひ出したんです。新聞の方は、特殊爆弾とか何とか爆弾とかいっていた。

あの日はちょうど工場も電休日で、皆さんが遊びに出ておったんです。それで広高の薫風寮はどうなったか、探しに行こうというので、2つの班に分かれて、私は残って、担ぎ込まれた病人を介抱するわけなんです。

半分の人がトラックに乗ったり何かして、広島まで行ったんです。行っておった間に、手に斑点が出たんです。非常に疲れるとか、そういう人もありましたが、その後、彼らもそのまま生きております。

そのときには、練兵場なんかにはズラッと生きている人も死んでいる人も並べてあったと思う。その中で、「広高生はいないか」といって、生き残っている人をつかまえて、トラックに乗せて持って帰ったわけです。そのときも、何日も何日も行ったわけですがけれども、最初連れて帰ったのもあるし、ひどいものは、4、5日たって連れ

て帰ったのもあるし、途中でトラックの中で死んだ人もありますね。元気のいいのは連れて帰ってしばらく寝かせておきましたら、手の施しようもないのです。薬を飲んだり、水を飲ましてくれとかいって、そのうちに死んでいったわけです。

青盛 あなたらはみんな祭におったり、下宿をしても……。

内海 下宿してなかったです。みんな学徒動員で、工場の祭におりました。

青盛 それで米穀通帳は、どこへ預けた？

内海 米穀通帳は、向洋の日本製鋼所の第三報国寮の食堂に預けていたんです。

青盛 だから、向洋は広島市にあらずで、私が推計している24万6000人の米穀通帳の中には入らぬわけですね。

内海 その外ですね。そのころ、移住人口じゃないけれども、遊びに行った人がおるわけですね、ちょうどそのときに。

青盛 遊びに行った人口もあれば、反対は行かないね。だけど、休みなのに、よくあなたは広島へ行かないで……。

内海 それはその前に、橋があって、そのころ履き物がなくて、わらじを履いておったんです。橋の中に穴があいておったんです。そこに足が落ちてけがをしちゃったんです。包帯で巻いておったんです。そういうこともあって、祭でごろごろしておったんです。

その祭の窓から見ると、こちらの海田市の方から、バスがどんどん広島の方へ行っておるんですね。あれなんかも一種の移住人口でしょうね。知らないから、広島に



流れて入っておったんですね。そう人がおそらくやられたんでしょうね。

青盛 朝の8時15分まで入っていった。

内海 入っている人はやられたわけですね。バスが何台も何台も入っていったんですね。

青盛 私は8月1日に京都から呉へ帰って、そうして前の日に福山へ寄って、そして奥へ、疎開しておるところへ行ったわけですね。そうしたら、同居しておる人の主人が、広島陸軍病院の軍医でおって、その人の兄さんが暁部隊の部隊長をしておる人で……。

内海 福山の。

青盛 兄さんが何ぼ探しても、その弟さんの陸軍病院での姿が見つからぬわけよ。だから、原爆死したことが推定されるわけだね。ですが、兄さんを通じて、広島に部隊が何部隊あったかというようなことを聞いたり、いろんなことを聞いたわけですよ。そうしたら、その人から来た手紙の封筒が、破られたままで私の方に投函された。ということは、結局やはり防諜というか、そういう人は戦犯になるから、あまりスパイされちゃ困るというふうな事情があったのですね。

そういう個人的なことではなしに、原爆のときに心配になったことは、私らもいざということがあれば、京都大学へ駆けつけるという形になっておったわけだ。その後、終戦までに10日ぐらいに京都に帰って、京都大学で警備につくというので、10日に1遍ぐらいに宿直をしたりしておったことがある。だけど、この原爆が落ちて以来、正直に勤務場所に行くのはバカだ、家で横着して寝ころがっておる方が助かるんだという考え方ですね。そうす

ると、原爆や戦争で殺されるやつは、優秀なやつが殺されるのか、横着者が殺されるのかという命題が出てきたわけだね。それでこれから朝早く起きて、勤め先へ行くことはやめましようと考えて、それから多少朝寝になったかどうか知りませんが……。 (笑)

そうして昭和24年(1959年)に広島へ来てから、そういう意見を持っておった。そうしたら、同じく原爆の体験をした豊田清史という中学校の先生の人に会ったところが、その人が反対の経験をしたというんですね。それは中学校の教師として教育委員会へ勤めて、教育委員長としておる人と一緒に、その日の朝、奥の庄原の方へ出張するわけだ。その人は若いから、朝の8時15分までに駅へ行って待っておる。ところが教育部長か上の人は、もとの県庁の官舎で、早く起きて支度しようとしたらしいんだけれども、そこにおったために、やられて死んだわけだ。

正直に出た人は助かって、横着したわけじゃないけれども、県庁に眠っておったのが死んだという例を聞いたときに、なるほど早く起きるか、一足先に広島へ行って、一足先に去るのが一番いいんだ。しかし、その時間に行くべくして行っておったんなら、本望ではなかろうかと感じたわけです。

それと時間についてですが、どうも8時15分といわれておるけれども、これは原爆を落とす予定の時間であって、現実には15分が少し後になっておったらしいというふうに、ぼくは思うのです。予定どおり落としましたといえはいいけれども、落とされた方はドカンとなって、1分や2分はわけがわからぬ。それをもっともらしく時計

の針を8時15分に回してこわして、これでこわれたという人がありますが、これは大うそだと思うのですね。

内海 豊田清史さんというのは、そのとき駅にいたんですか。

青盛 駅にいて、「部長さん、早う来ぬかな」と思って待っておったら、ドカンと落ちて、部長さんは死んだけれども、私は助かったといって-----。

内海 駅まで"おれば"よかったんですかね。

青盛 そういうことでしょうね。駅のプラットというか、平らなところにおると、バツと光で当たりますからね。

内海 便所かどこかに入っておったか-----。(笑)

青盛 建物の陰とか。

内海 あのときに、やはり軍隊の人で、朝早く出張だというので、1人だけ自分が広島から出て、助かったのがいるんですね。あとは全滅で、その人はなぜ自分だけが助かったかというのを追求して、ついにクリスチャンになったという話ですね。そういう1つのショックなどが、宗教的な求道の契機になるのですね。

青盛 そういう意味で冗談をいいますが、羽白(幸雄)君が、例のとおりやせ衰えておるから、学生がいうたか、わしらがいうたのか知らぬけれども、羽白君のことを「焼け跡のキリスト」といっておったんです。あなた、覚えていませんか。

内海 あの方はどこにいたんでしょうか。

青盛 どこにおったんですかね。

内海 助かったんですね。

先生のいまの説を発表なさって、何か反響がありましたか。

青盛 統計学会で発表したときには、A B C Cの人が、私が15~16万も死んでおるということをいいましたら、そんなに殺したのかというような、ぎっしとした態度で見るわけだ。日本人でA B C Cに勤めておる人で、日本名の人ですが、学会の関係の人です。その人が詰問してきた。

もう一つは、中国新聞の後の論説部長になった森脇幸次が、中国新聞の記事を批判したものだから、えらいきげんが悪くて-----。

それはそれでいいんだけど、先ほどいったように、県庁の雑誌にずっと書いたりしておって、被団協という連中の批判をすると、やっぱり原爆被害者に泥を塗るのかという態度で、県庁にどなり込むわけよ。そうして統計課長はけしからぬという。そうすると、私の原稿を採録した女の事務員が、「私はどうしましょう」という。何も統計課長がいうことではない。私が書いておるんだから、私のところへ文句をいえというけれども、ぼくのところにいうてこぬ。

だから、本当に純粹の統計調査の問題だと思っていうておっても、やっぱり社会的には影響というものを考えて、政策なり、原爆の質的にひどいことを、量的にひどいことにいかえなければいけない。その評価の仕方が長崎と広島とでは逆になるわけよ。そうすると、宣伝効果は広島が上手で、長崎はあんまり救われぬというふうにして、両市の間に嫉妬といいますか、あつれきがあったりする。そういう意味で、広島と長崎と両方比較して議論すると、よくわかるわけだ。

それともう一つは、地理的に三差路になっておる、こ

こへ落ちたわけだ。なぜカトリックの聖地に落ちたか、なぜアメリカ移民の一番盛んな広島に落ちたかというようなことは、君にいうと笑うかもしれないが、「見えざる手」というものじゃなかったらうかと思ったりするんです。

内海 アダム・スミスですね。

青盛 次に、昨年(1979年)の4月に「統計の泉」に書いた「地域人口と議員定数の不均衡問題」ということで、サブタイトルを「—選挙区議員定数の再配分への提案—」というのです。

これでやっておることは、全国の有権者数を、43年の9月10日現在で調べておるわけだ。そうして第5表の「衆院選挙区定員と有権者と国勢調査人口数」というもので、511選挙区で、議員定数と、選挙人と、総人口を定員で割った表があります。これを基礎的な統計原表として、分布をそれぞれ調べております。

そうすると、「昭和50年の選挙区別の平均人口分布」という第6表によって調べてみますと、選挙区は130あるわけですね、130区の国勢調査人口の度数分布が書かれておるわけでありましたが、この中で、人口33万5000から36万5000の間に、10の選挙区が過密な地区として集中しております。これに対して15万5000から18万5000、18万5000から21万5000のあたりに、29、25の選挙区が分布しております。こういう分布のことを、私は双峰性分布というわけでありまして。

そうすると、過疎な地域は、15万から18万5000人のところに集中しておるわけですね。これを全国を突っ込み

で平均しますと、21万9000人になるわけです。ですが、21万9000人という分布のところには、そんなに大きな山はないわけですね。両方の山の、過疎な地域の近くに散らばっておるわけですね。そうすると、人口密度の多い山と過疎な山とに、質的に違う2通りの分布があることになります。ですが、全国突っ込みの平均をとると、21万9000人になるわけですね。

この結果を、高等裁判所や地方裁判所の裁判官が、どういっておるかということが、ここで私がテーマにしておるわけでありまして。新聞記事の多くは、1票の値打ちが5倍になるというふうに、1票の差を議論しておりますが、1票の価値を等しくするわけにはいかないわけですね。だから、選挙区ごとの国勢調査の人口をコントロールして、再配分すべきであるというのが、この議論であります。

そうすると、この選挙区というものは、どのようにして割り振りされて、議員定数が生まれたかという点、根本的には昭和22年(1947年)の統計法の実施の年の国勢調査に基づく地域人口の配分によって、議員選挙区の定数が決まったままですね。それ以後、国内移住は自由に放任されたために、アンバランスになってきたわけですね。それを直す責任は議会にこそあれ、裁判所にはないわけですね。裁判所がこれを実行しようとする、3権分立で要らぬことというたことになるわけですね。だから、裁判所をてこにして、アンバランスを直させようというゴリ押しをやってもダメなわけですね。

しかし、そういわれると裁判官も苦しいものだから、いろんな理由をつけてやっておるので、安藤という裁判

官の裁決やそれに続くものとして、心情的な過疎地域への同情論をぶちまいて、現実の経済問題の解決はなおぐりにしておるわけですね。せめて過疎地へ投票を厚くしてやれば、過疎地が救われるかのような議論をしておるわけですね。そうして平均を求めるときにも、東京地方がそうであるように、選挙区ごとの議員定数が30万人というふうに目の子で計算して、30万人に比べては、三十何万人の千葉はそんなに大差がないという発表をしたとたん、全国の平均は20万人といわれて、あわてて30万人を20万人に直しただけで、自分の判断はそのままかり通っておるという現状になっておるわけですね。

だから、根本的には、選挙区の議員定数を、現実の3人から5人の範囲内で訂正すべきであるというのが、こういう論文の基礎的な考え方ですね。その中心を成しておるところは、裁判官が、私のいう統計の分布、それから選挙区を単位とするという単位を無視しておるわけですね。1人当たりの投票とか、1議員当たりというふうな単位ではいけないわけですね。しかも、集団性格が、山が2つあるというふうに分かれておる場合には、困るわけですね。

それは男と女の対比をいう場合も、やっぱり身長でも、体重でも、男の方が身長でいえば8%高いわけですね。女の方が逆に8%少ないというか、または男女同数かという議論を、いつも私の考え方のチェックポイントにしておるということです。

それと結果において、参議院議員とか、府県の大きい単位にするということになったり、それからばなはだしきに至っては、1人1区という選挙区を設けることが、

どっちが勝つか負けるかを決めるのによいんだという議論があるために、必要以上に波乱を巻き起こすという問題が起こってくると思うのです。ある市において、市長をどう決めるか、国全体において総理大臣をどう決めるかという問題と、それから選挙区ごとになる人から5人が、いわゆる中選挙区制を守ってやっていくことが必要なのわけね。

そうしてこの議論の中に、たまたま広島1区と広島2区とが、広島市の政令都市の出發から、2区の地域を広島市に合併するという現象が起こったために、具体的にいえば安芸町が広島市に合併されたけれども、あれだけ2区選挙区にしてやるんだというふうな無理な口約束を、広島市長がするものですから、一旦は広島市東区の中に入れておいて、どうもこうもならぬようになったわけね。

それからもう1つの問題は、府中町及び五日市町の問題が出てくるわけですね。これは単独の市町村制を取るか、広島市と合併するかという問題が、いつも政策の問題としてあらわれてくるわけですね。同一地域において、賛成か、反対か、どうでもいいか。どうでもいいという中立の立場をとれると一番いいんですが、賛成か反対かに二分すると、とても大変なことが起こるわけね。

けさの新聞で見ても、五日市が広島と合併するのが当然なのに、なぜ合併しないか。合併しないような議決をする町会議員や町長は、リコールするぞといって、リコール運動を起こしている人がありますね。前のときには、町会議員が23対22に割れて、大事をしたことがあります。だから、その投票による是非1つを争うという態度をと



ると、その場所におる者にとっては、非常に苦しみを与えることになりますね。

そういう議論ができるという意味で、この問題でわかるように、具体的な行動をとるときに、賛成か、反対か、どうでもいいかという三つがもみ合うと、この後の「統計の泉」で書いておるように、大岡越前守の「子方ノ兩損」という話に続きます。それこそ横山雅男さんではないけれども、漫談をやっておるというふうに思われがちであります。私は大まじめにそういうことを書いておるわけです。

「江戸っ子の生れそこなひ金を溜め」という川柳のように、宵越しのカネを使わないで済めば、日々是好日で、結構毛だらけ猫灰まみれといえましょうが、毎日のちらい儲けたカネを、じゃんじゃん湯水のように使ってしまうと、明日の天気も気にならないばかりか、二言目には「何をいっていやがるんでエ、べらんめえ」となる世界がある。

「売家と唐様で書く三代目」とあるように、長く続く家々は跡継ぎが生まれません。ときには「貸家」と札が斜めに張ってある家も見受けられる神田に、長屋に独居しておる大工の吉五郎がいました。

そこへ左官の金太郎という男が、柳原で拾った吉五郎の所持品と思われる財布と書付と金子兩なりを持参したというのが、話の初めである。

しかるに、吉五郎は財布と書付は受け取ったけれども、「金子兩は受け取られねエから、てめエ、持って帰れ」といったので、さあ大変。左官も手に職があって食べている人間一匹、正直者一途な職人かたぎで、ぬれ手にア

ワのネコババはできないとなると、吉五郎が先に手を上げて金ちゃんを殴った。そこで江戸の花、殴り合いのけんかがおっ始まった。そこへ双方の大家さんが入って、仲裁するやら応援するやらで、おさまりがつかなくなってきた、ついに大岡越前守の裁判を煩わす次第と成った。

「お互いに懐中より飛び出したカネは受け取りがたいであろうが、そこは越前に免じて、余が所持金1両を加えて金4両とし、これを2分して両名に2両ずつ受け取らすことにいたすが、これはいかなることに相成るかと申せば、大工、左官の両名は、3両素直にもらえばよいのに、この裁定で1両ずつ損に相成る。その上に裁く拙者も1両損をする。これをもって3方1両損で1件落着とする。」ということになるわけですね。

ただいまのように、選挙区別の議員定数1人当たり有権者数の不均衡是正訴訟のたびごとに、選挙管理委員会が裁判費用を支払っていたのでは、憲法に反するか合憲であるかの訴訟は、際限もなく継続するであります。

そういうことから、江戸っ子の、「おまえ18、わしゃ20、死なぬ子3人、使ってなくならぬ金10両」ということを説明しておるわけであります。

これは、「お互いに江戸っ子である、亭主と奥さんがいつまでも若くあって、男は20のまま、女は18のままで、その間に生まれる子供は3人でよいけれども、死なない、丈夫な子であってほしい。ついでに願いたいことは、使ってなくならない金10両があれば、あとは何も要らないで満足じゃ」というわけになる。

しかし、疑問になることは、誕生の子供の性別と順序数である。江戸っ子の純粋さが子代続かないとすると、

江戸っ子の養子娘に、田舎からの養子をもらうにしくはないとすると、一姫二太郎がよいと思われるけれども、3番目となると両親が性別判定でけんかになる。こうなると、大岡越前守も裁判ができないであろうが、産まないよりも産むがやさければ、いずれかが生まれる。

そういう意味で一家5人で金10両とは、1人ずつが金2両という計算になる。男はすべて金2両を持ち合わせて幸福そうに見えるが、昔から女なくては夜明けぬ国といわれているくらいだから、女性でも平等に金2両を持ち合わせる必要が生じる。そのようにして、いったん生まれた以上、男女ともに金2両ずつであるが、母胎内にある胎児は男児が多いにしても、中途半端な性別は困るので、誕生する子供の性別判定までは、2分の1にすればよろしい。そうすれば、金1両が存在することになる。

そうすると、生まれてから死ぬまでの各自の所持している金2両と、そで振り合うも他生の縁と見なされる社会共同体に提供する金1両の社会的奉仕の力ネが、新しい解釈によるる方1両得の開眼となることが約束される。

つまらぬことをいっておりますが、ここでもハンセンの「人口3段階論」というものを紹介しております。

これは随筆ですが、やっぱり対峙するものを1つに決めるときには、どちらでもよろしいという立場じゃないと困るわけですね。

内海 先ほどの大岡越前守のあれは、2両ずつ分けて仲よくなったわけですか。

青盛 だけど、大岡越前守が1両を出したのは、どこの1両ですかということを、ここで説明しておるわけよ。

選挙区の裁判でやる場合には、選管委員会が裁判費用を

出したりすると、何遍でも裁判が続くことになる。自前で裁判をするようにせぬと困る。

内海 ここで先生がいおうとなされたことは、有権者数に応じて議員定数を決めようということですか。

青盛 人口に応じてやっておる。したがって、有権者数を固定するわけにいかぬ。総人口を固定してやっておればよろしい。だから、昭和22年(1947年)の段階においては、これがすべて比例しておったわけよ。

内海 いまもそれを比例させよということですね。

青盛 させるのが当然よ。封鎖せずに出入り自由にしておけば、片寄るのはあたりまえよ。

内海 人口に応じて定数を訂正していく。

青盛 することが必要であるというふうにやっておるわけ。三権分立という立場からすれば、司法権と行政権と立法権とがけんかするのはおかしいわけよ。

内海 立法の方でやればよろしいわけですね。

青盛 立法権の方でやるべきことよ。それを裁判所の力をかりて、立法権の議員に文句をつけようというのがいけないわけよ。

内海 イギリスでも1830年代に、腐敗選挙区を改正してという運動がありましたね、人口に応じて議員定数を決めろという。

青盛 そういうことです。だから、人口に応じてやることが、国勢調査なり統計法のどっかにあったのが、いつの間にか消えておるわけよ。そうして国勢調査をやるときに効能書きには、チラッと出たり引っこんだりするわけよ。

そうして、私が引っかけていうとることは、移住禁止、

封鎖が定住圏構想になるという考え方がいけないわけよ。  
江戸時代の人返しと同じようなことになるわけよ。

内海 先生がこれを発表なさって、先生の説を支持する意見も出てきましたか。

青盛 何もないね。裁判官に読ましてやったらと思って、裁判所の人の統計教育がまず先になるね。統計教育を受けない者は、何ぼ聞いてもわからぬね。だから、一人当たりの投票権の平等ということはありません、平均に分布するわけだから。選挙区ごとの分布の幅で、この範囲内はということなら、正規分布でシグマを取って、95%の範囲内を有効とするということならできるけれども。

結局、議員一人当たりの定数の分布も、山が2つあるんだ。これはそうまでわからぬけれども、人口になると、はっきり2つの山がわかる。これは府県単位の有権者数にすると、こういうふうに正規分布になってしまう。それを全国を選挙区とする50人の参議院議員になってくると、また正規分布である。これは分布が大きいけれども、ここにある表を対照して議論したいということですね。

内海 この4表の度数は山が2つになるわけですが、これはヒストグラムが何かにお書きにならなくてもいいですか、これだけで。

青盛 書いても、バイモーダル、ヒストグラフとかヒストグラムということは、書いて言わにゃわからぬというのが、書いてもわかってももらえないね！

内海 これを見ればわかるのですか。

青盛 見ればわかるためには、その人がそういう統計教育を、グラフなりヒストグラムを書いて、質的に違うも

のがあった場合には別々の分布だ、込めて全部平均とって、これはうそだという判断が必要なんです。それが統計研究の質的分析につながるんだというつもりです。

これも1000部の発行数と別に100の別刷を刷ってばらまいても、何にもならないですね。何にもならないというてはおかしいけれども。

これと似たようなことで、ひのえうまの昭和41年(1966年)に生まれたうちの孫がおるわけだ。それが小学校に行く6年後には、ちょうど東京で統計学会があったから、ひのえうまの人が小学校に行く年から、4月から5月、6月までの子供を早生まれの方へ繰り上げて、早く入学させる提案を文部省あてにしたわけよ、その資料を添えてね。

そうすれば、ひのえうまの年の人が少ししか学校に行かないということがなくて、小学校の教員の首も助かるし、具体的には、うちには、4月2日と4月6日に生まれておる男の孫があるわけ。それが遅生まれで学校へ行かにやらぬのがかわいそうでならぬから、わしと同じ早生まれにしてやって、がんばらしたらと思ったわけよ。

だけど、現実には、昔のように、4月、5月、6月でどっと落ちて、また8月も落ちてまた秋には上がるようなカーブをせず、季節変動がほとんどなくなってきたね。1年どこで切っても同じことよね。だから、変える必要はないし、それから政策めいたことをいうて、これが本当だと思っても、世の中はなかなかそういうふうにならぬということが、ぼつぼつわかった。

しかし、地域人口と議員定数の不均衡問題に対する解決への提案、「3方1両得」の結論としては、立法、司法、

行政の3権分立において、いずれかの2者の対立の両成敗ではなくて、男も女もそれぞれ金2両持ち合わせている場合に、母胎内にある胎児は、やや男児の割合が多いにしても、中途半端な性別は困るので、誕生する子供の性別判定までは2分の1とすれば、それぞれは、金1両の存在となる。

そうすると、生まれてから死ぬまで各自の所有している金2両同士の間、新しく折出す金1両は、新しい方1両得の開眼となる。

その結果、いままでのように、司法権に委せるのではなく、行政、立法のいずれかの選択において、両者のいずれかの1両得において3方1両得の解決ではなく、3両プラス1両得を2分することなく、その一方の1両得のまま、自由に3者中からの択一が選ばれたらよいことになる。これで、賛成と反対と中立の3分割ではなく、いずれか一方を採用した3方1両得の確立に解決の方策を見出すことができるであろう。

われわれは、素直に3者から、第1義的に肝要なものから、1両得の前進を図るべきである。まんじ巴の3すくみにならない統計の質的な選択こそが、数量化の前に決定される必要があると考えられるわけです。これがいまの問題の結論です。

また、もう1つは、生命表に対する過信というか、迷信があるわけよ。

その1つとして、元国立公衆衛生院の川上理一先生がことしの学会にも報告なさった「70歳以上の生存者及び長寿者の性比」ということをいうておられるわけだ。そ

の根本に、「生命表とは死亡現象を数量的に現わしたもので実用的にも原理的にも大切である。」ということを書いて、たとえば、いま生まれたばかりの子供は、1978年の生命表では男72.97歳、女78.33歳だから、5.36歳という差を求めておられる。

それから次は、男の0歳の平均寿命を女の0歳の平均寿命で割ると、女の93.1%というふうには、男の割合が少ないということを書いておられる。

これが何を意味するかということなのですが、生命表というものは、男女同数を予定しておるわけで、違うことを生命表から比率を出すことは間違いであると思うわけだ。だから、生命表と呼んでおるけれども、実は死亡表なんで、死亡年齢を、出生イコール死亡というふうには標準化しただけのものである。

それからその後、厚生省の調査によれば、1979年の100歳以上の人口は、男241人、女1025人だから、女の人口で男を割れば、23.5%というふうになる。これは生存しておる者がいずれ死ぬという場合ですが、100歳までに死ぬという計算の中に入って死ぬ者をもって、こういうものは生存者イコール死亡者という迷信から来るわけね。

その後、生まれたばかりの赤ちゃんでは、女100について男105であるというておるけれども、私は106と思うとるね。経験的原則であるのに、生存者の性比では、0歳では93.5%、100歳以上では23.5%。かえって男の方が少ないのはなぜかという議論をしておるわけだ。だから、ここにも、国勢調査における生存人口の構成の問題と、死亡率の比較の問題とが、混同されておるわけだ。

だから、私がいつも研究において問題としておること



は—— どうもほかの人の論文を引用するときに、何年の統計かということを書いてないので困るわけですが、「長寿と食糧との関係について」という論文を書いたのは、1954年の10月東北大学の衛生学教室として発表された統計を引用しております。その基本になっておる表によれば、人口総数に対する70歳以上の者の割合という構成割合で、全国平均が2.65%であるときに、長寿県という地域を鳥取、島根、徳島、高知というふうに取り出し、東北地方と新潟、富山、愛知、兵庫というところを、短命県としておるんですね。平均に近いところは、長寿でもなければ短命でない、中寿県ということになるはずであります。

そこで府県別人口に対する長寿者の割合というもので、1番から20番まで各府県を並べてみる。そしてその府県の出生率を千分率で並べてみる。その次には、その府県の甲種合格率を出しておるわけね。

この甲種合格率というのは、昭和10年(1935年)甲種、乙種、丙種が合格です。丁と戊が不合格でした。だから、甲種合格率がいかに地域の健康度の尺度であるかのようになり、思われておるわけだ。ですが、これは必要に応じて、甲種でも乙種でもとることができるわけだ。だから、必ずしも地域の健康率にはならないということを議論しておるわけです。

その次に、移住のときからいつも問題になっておる、各府県の徴兵検査を受けた20歳現在の人を取って、20以上で40までの人で、外国におるから徴集を延期しておる者の割合ができるわけですね。これを徴集延期率といっておるわけですね。徴集延期率と移住係数(昭和5年の

出生地から現在地への移入に対する移出の比率)を並べて比較してみたら、どういふことになるかという議論をしている。

あるいは、女の人口における70歳以上の構成比率を町村別にとってみると、おばあさんの多いところは長寿村ということになるわけね。若い者が働いておるところは短命村ということになる。これを一括して、若い者と、年寄りと、中どころとの家族構成を見たら、生まれてから死ぬまで同じところにおれば、村の名前が、長命村とか短命村とかできるけれども、同じものの構成比率だから、そんな議論はできないというりが、私の意見だった。

食糧不足をどうするかというこの現代版が、将来人口において、年寄りの割合が多くなるという議論は、年寄りが多くなることが困るのではなくて、若い者が足りなくなっておる。若い者が生まれてこぬという現状が恐ろしいわけね。年寄りはいつでも退場するわけよ。100歳以上までのさばってもらいたくないわけよ。

内海 出生制限でしょうね。それが問題なんでしょうね。

青盛 だから、現実の出生率と死亡率というものを、全体的に見る考え方が必要なんです。だから、死亡の3倍くらい出生しておることによって、3世代のものが現実の世界におるわけよ。これが理想であるかのように、静止人口で出生数イコール死亡数になったり、それが1世代が25年続いたら、人口ゼロになるということなんだ。だから、粗出生率や粗死亡率であって、粗自然増加率であるからいけないというものではない。だから、マルサスなりハンセンを復活して、現実の人口は3世代おるんだ、プールしたように入り口と出口とがあって、両方計

算して議論するという考え方が要するという見解になるわけだ。

内海 先生が先ほどいわれた、だれやらがやった長命村とか短命村とかいう計算ですね。その場合には、人口移動は勘定に入れてないんでしょうか。

青盛 入れてない。だから、具体的にその村をとると、どういうことになってくるかということになって、たまたま広島県の中をとると、八鉾村といって、比婆西域のあたりに道後山があるだろう。あそこの出稼ぎ地がおばあさんの割合が少ない。そうして広島県で一番長寿の村は、立花村と高根島と久代というところになるわけよ。そうしたら、おばあさんを立花村や高根島へほっておいて、八鉾のところに出稼ぎに行っておるわけよ。

そうしたら、尾道の向島あたりが長命村になって、ここは日本一の長命村だというていばっておる。それを尾道に合併すると、長命村のパーセンテージが狂う。だから、合併をきううわけよ。おかしいことよ。それを全国に向かって、宣伝し回っているということは、現実的には、きのうみたいに石橋のブリヂストンタイヤが、自分のゴムタイヤを輸入するかわりに、小麦粉を買い取るという取引材料に使われておる。

そうして、これを議論しておる東北大学の近藤正二という人も、結局新潟生まれの人で、米どころで生まれたし、東北大学の方も、そういうふうに地理的な問題も出てくる。

内海 生命表をつくらば、どういふふうにつくったらいいわけでしょうか。

青盛 生命表は、死亡数をどういふ年齢構造で標準化し

て比較するかという意味で、標準化の手段として、出生数イコール死亡数という前提で議論する。だから、生命表の年齢構造は、与えられた年の初めに死亡が始まって、その瞬間にゼロ歳から100歳まで全部死んでしまうことになる。それが現在の死亡表ということになるわけだね。

だから、死亡表の標準化という問題が、ここに出てくるのですが、そのときからの問題で、私の「社会統計学研究」の120ページに、「本邦大都市の人口動態率」というのが、昭和30年にあらわされておる。これは、普通の総人口を分母として、出生数、死亡数を割った出生率と死亡率と、自然増加率とが、東京都区部を初めとして、25番目の堺市まで分布しておるわけだ。

内海 それは粗死亡率、粗出生率ですか。それを今度は、訂正死亡率に直すわけですか。

青盛 だから、場所系列と時系列とを書いて——この30年のものと比較しておるのが、昭和12年の6大都市における出生率と死亡率の場所的共通性というものを……。

私の「人口学研究」の中の168ページの第3節、「本邦内地六大都市人口の再生力に就て——国土計画に於ける都市人口繁殖率の問題——」というところで、統計は175ページに、「全国及び六大都市人口動態率の比較」という百分率の比較をしておる。そうして普通出生率、死亡率、増減率、標準化された増加率が計算されておる。標準化増加率は水島という人の計算によるわけですね。そうして昭和10年の標準化年齢構成における人口動態率は、館総氏によっておる。

結局、都市人口の増減を標準化しようとするれば、増減の逆数になるだけで、出生、死亡の力だけでなしに、移

住の影響を込みにしておるわけだ。だから、純粹に自然的な出生、死亡の差ではない。その間、移住全体が絡まっておるという議論になる。だから、大都市に人口を供給しておる周辺地域や田舎の人口を、総ぐるみに問題にしなければ、都市人口だけを問題にしても標準化はできませんということを経験しておるわけで、死亡率は年齢構造によって標準化できるけれども、出生率は年齢構造でも標準化できないほど、ゼロから無限大まであるわけだ。平均的な出生率というものはあるはずである。

ここでも、全体としての出産の力であって、その間には、ジューズミルヒヤグラントのように、一夫一婦制度によって全体の人口がふえるわけだ。人口をふやすために、個人的なことをいうと、1人の人がたくさんの奥さんを持って、種付けに回るとか、ナチスの人種の改良というふうにして、特定の人の種をまいても、人は育たぬわけよ。能率が悪い。それがマルサスの「人口論」が支配的になった理由である。

マルサスの「人口論」の中に、たとえばモンテスキューなんかにいわすと、「ペルシャ人の手紙」によって、ペルシャでは1人の夫がたくさんの奥さんを後宮に抱えておるから、人口がふえそうなものであるという個人的見解を述べておるわけだ。社会全般として最も能率がいいのは、そういう一夫一婦制度を中心とするものだ。ただ、時間的にはどっちかが欠けた場合に、続けて再婚する場合を含むわけだ。

内海 一夫多妻の場合には、人口は減退するわけですか。  
青盛 国全体としては、人口がそうふえないわけよ。個人をたどった場合と、社会全般の平均的な数え方が違

うということというところわけだ。だから、1人の夫がたくさんの子供を持つ例をシグマしていきさえすれば、最大の効果を上げるというものではないわけだ。もっと社会というもの、男は女のことを思い、女は男のことを思うという-----。

内海 一夫一婦制度が、人口増加になるわけですね。

青盛 それだけじゃならぬわね。ただ、一夫多妻や一妻多夫よりは、一夫一婦制度の方が正しいわけよ。社会全般の生産力や何かとの兼ね合いがあるから、どうなるか。

内海 先生が「社会統計学研究」の中で、グラントのことを書いておられるのですが、そこではグラントは一夫一婦制度を推奨するわけですが、動物の世界では一夫多妻なんですよ、牛とか羊とか。

青盛 そういう動物もあるね。だから、ああいうことになる、そういう自然現象と社会現象の類似性もあるし、一致性もあるしというふうにして、結局、個別の集団が具体的に-----。

グラントのところだね。それぞれの文献によって調べてみたんだけど、動物の場合をいうとる場合と、人間の場合をいうとる場合とで、それとキリスト教にも仏教にもあるんだけど、人間を一段と高等なものに考えるとか、あるいは自然の秩序をみずから破ったり、維持したり、あるときには分け、あるときには一緒にしというふうな問題があるね。これは、それぞれゆっくり訳したり何かすれば、いい問題が書いてある。

内海 グラントも、ジューズミルヒも、みんな一夫一婦を支持しておりますね。

青盛 そういうことだね。だからグラントにおいては、

ロンドンというイングランドを代表する都市が問題になっておるし、ジューズミルヒにおいては、プロシヤという国全体が問題になっておるから、これを大数法則とすることもできる。

それがマルサスをくぐって、ハンセンになると、都市人口の問題になっておるけれども、都市人口だけをパカッと取り出すと、周辺の農村を含めて、国全体の人口のために調和というか、全体の増殖力を維持して、その農村の中から昇進するものもあれば、落ちていくものもあるわけよ。だけど、移動することにおいて、生き返りというか、輝きを増してくるようなものがある。輝きを増さない場合も、流浪して落ちゆく場合もあるね。

内海 ハンセンのときですが、農村から都会に出てきますね。そこで中産階級になったわけなんですが、また中産階級が労働階級に落ちた場合に、また中産階級の人が都会でやっていけなくなると、また田舎に帰ってくる人もあるんでしょうか。

青盛 ハンセンの前提では、都市人口は死滅するという前提だから、帰るということは-----。

内海 労働者は田舎に帰れないわけですね。

青盛 帰るとか、疎開するとかいうことは、おかしいという考えでおるから、私ら、戦時中に軍と関係のある人がいうから、疎開せにゃいかぬということで、家族を疎開させたけれども、本当に戦争しようと思ったら、戦争一本にかかったらいいので、疎開したりするひまに、国がやられてしまうね。

内海 戦闘員は都市に行って、何かやってもいいが、非戦闘員の方は疎開して、田舎に帰ってくるわけでしょう

か。

青盛 そうして無理やりに田舎へ疎開させたのが、まだ都市へよう帰らぬ段階において、22年に国勢調査をやつて、その人口で普選をやった選挙区の議員定数を配分した。配分したとおりにして、そこを動くなどやればよかった。

内海 また東京に帰ってきましたね。

青盛 東京なり、それぞれ都会に帰ってくるね。そこを封鎖せずにおつて、それを安定定住構想みたいにしておる。何が定住かということだ。

内海 議員の数も、そういう中で人口に応じて20〜30年おきに改訂するといひですね。

青盛 地域ごとに改訂せにゃいけないわけだ。だけど、1人/選挙区にしておつたら、改訂が大変よ。全国すぐ変えにゃならぬ。

内海 30年おきぐらいにどうですか。

青盛 時間の問題じゃないよ。地域ごとにプールして考えにゃ困るね。だけど、全国の比例になるし、選挙費用がたぐさにかかるからという意味で、1人/選挙区にしようという案をとると、選挙区ごとにこっちにするか、こっちにするかというて、闘争するようになってくる。3方/両損にできるためには、少なくとも2人か3人おらにゃ困る。それが1つを争うのは、アメリカの大統領とか、合理的に選ばれた5/11人の代議士が、1人の総理大臣を選んだらよろしいわけだ。

ただ、自民党の中で総理大臣を選ぼうとすると、府県別に過半数をとった者が、府県別のウエートを獲得することになるから、アメリカの大統領の選挙のように、6



対4であるにかかわらず、各府県のウエートの過半数を取ったところがいいことになる。400対50というふうな開きになる。1人を選ぶときはそれでいいけれども。

ある地域の行動を1つに選ぶと、それに一致するものならいいけれども、大変なことになるね。ちょうど日本が戦時体制にやったときに、挙国一致体制ということね。本当に挙国一致できる場合はいいけれども、できないことまで挙国一致といわれたら困るし、負けた結果、だれが悪いというのを、一億総ざんげというふうに持っていくわけよ。

だから、きのうも問題になったように、京都大学の先生方で、戦争責任ではつきりやめにやらね2〜3の人が、やめぬでいい人も巻き添え食わして、ついでにやめましょうというふうにするわけよ。だから、私1人はやめぬのじゃというて、がんばるわけにいかぬだろう。

だから、副手であっても、私も潔く辞表を出したわけよ。ほかの人は、その儀には及ばずで残ったし、私もその儀に及ばずで残すつもりだったけれども、身分のふらついておる副手じゃいけぬから、助手にするためにはとこので切ってくれたおかげで、定年までの恩給をもらうのに困ったという事情が起こってきたわけよ。

昭和12年11月30日で、京都帝国大学経済学部の助手で、6級俸になった。11年ほどでやめて、昔はこういう辞令でも桐の御紋が入っていた。21年になるとすかしがなくなって、そのかわり3級になった。24年の8月に広大の助教授になったとき2級になった。14年かかって、ようやく1級になった。それで8年間で定年でやめた。

内海 これは広島に来られたときですね。高瀬さんが文

部大臣ですか。

青盛 高瀬荘太郎。

それから国勢調査のことをいうたから、40年の10月15日まで「国勢調査員を命ずる」というので、県の統計委員会もやっておったが、町内会で私を調査員にした。あれでも5000〜6000円で調査員を引き受けた。その調査員の費用で、家の前に街灯がなくて街灯をつけたこともある。一応40年でも、桐の御紋をつけておったな。いま、どういうふうにしておるか知らぬけれども。昔はこれや勲章があると、新宿御苑やいろんな御所を拝見できたということもあった。

内海 国勢調査員というのは、どんなお仕事をなさったわけですか。

青盛 それは調査員として調査紙を持って行って、「これに書いておいてください」といって、書いてもらったのを集めて、その当時は個票みたいなのに早して書き込んだんですよ。そのときにチェックしてみてわかったことは、きのうもいうたけど、配偶関係があるかないか。ある場合はあるでよろしい。ない場合は、離別か生別か死別か。生死なんか聞かぬでもいいわけだ。だけど、ありとかなしというのが、きつく響いたために。

私が調査員になったときに、米の配給店に勤めている女の人が、小学校5年生か6年生の男の子とおるわけだ。その男の子のところへ、「有配偶関係」と書いてあるわけ。それでこれはおかしいから、米屋へ電話をかけて聞いたら、「あれは配給があるということです」って。(笑)

内海 間違っただけですね。

青盛 米の配給を受けておるということを、「有配偶」と

書いて、「それはいけませんな」といって直したわけだ。そういうふうにこっちが尋ねてもいつも留守をしておるから、米屋へ電話をかけて、そうした場合はそれでいい。

ことしの調査カードを見ると、名前の下に電話番号を書けとなっているわけだ。ぼくはうっかり書かずにおいたら、「電話番号がありませんな」といって、町内会の人というところわけだ。それがおかしくて、そんなこと電話番号で聞けるぐらいなら、電話番号書く必要ないわけよ。あるときは、世帯主の署名の下に印鑑を押した時代もあるわけだ。印鑑なんか要らぬニっちゃという。だけど、印鑑を押さすというようなこともある。

もう一つは、先ほどいった13号台風を、初めは女性の名前でいっておったし、東半球では男性の名前でいっておった。しかし、平和条約を克服したからには、女性の名前で呼ぶことはやめようというので、13号台風としたわけよ。13は縁起が悪いということがよく覚えておるわけだ。それがことしになってみると、15号でマリー台風、これを洞爺丸台風と呼ぼうとなっておる。そうすると、15号とマリーとがチェックされると、これは間違いだということになるわけ。

このことは、いまグリーンカードとか、税金かけるような国民総背番号化が進んでおる。番号はよろしいけれども、その番号の人を処分するときに、ちゃんと本人であるかどうかということを確認めにや困るね。それが番号だけが独立して操作されると、非常に間違いを来すことになるわけだ。

だから、最近広島市も区制を敷いて、印鑑証明書を番号化して、各自に持たしておるわけだ。それは本人と市

役所の機械しか知らぬのだから、今後は、本人以外の人  
が持ってきてても、これさえ出せば印鑑証明は取れます。  
本人が本人であるという証明なしに、これを使われたら  
困るわけでしょう。これで事務簡素化ができた、委任状  
も要りませんとって、区役所の事務の簡素化はわかっ  
ておる。これは非常に危険なことだと思うのです。

そういうことをいうと、これでごまかされるような土  
地や財産を持っておる人は、幸福だといってうらやんで  
みたり、消費税がたくさんかかってくることにご理解を  
願うと押しつけられても、それはなまじっかな信仰の場  
合には、税金を出すことがうれしいと思えとかいうこと  
になる。だけど、キリストの前で、おまえの持っている  
コインを示せといった。そうしたら、そのコインはカエ  
サルの像が書かれておるだろう。カエサルのものはカエ  
サルに返し、神に属するものは神に返せという有名な言  
葉があるね。

クリスチヤンの問題でなしに、統計の問題だから、や  
っぱり統計に属するものは、統計で判断してほしい。そ  
うでないものは-----ということになるけれども、大事な  
ことは統計の質と量よ。先ほどいったように、「初めに統  
計あり」ではなくて、ある事実があつて、これを統計で  
どうとらえるか。とらえられたもの、統計と真実とが、  
どう合うかというチェックが必要なわけだ。チェックな  
くして因果関係なり何かをすると、大変なことになるわ  
けだ。

たくさん関係があつたときに、1つを選ぶことはで  
きるけれども、2つ、3つになると非常に困るわけよ。  
順序を立てにやいけぬ。そうすると、「一番大事な1つが

わかれば幸いです」という態度をとるべきであって、国勢調査のときに、少し聞いてたくさんのことがわかるようにする。たくさんのことを聞いて肝心なことがわからぬようになるという調査は、やめた方がよかろうというふうに議論するわけです。

内海 この昭和21年は何ですか。

青盛 21年の3月に、戦争責任を取って総辞職を申請したわけよ。そうしたら、6月末ぐらいになって、副手をやめることを認めるというのをもらった。だけど、本来ならば、皆、辞令を取り下げて、これを出すということになっておったわけだ。だけど、わすかるカ月欠けても、そのとき、何を食うて生きておったんか知らぬけれども、大したことないと思うたが、その後、京大の助手から広大の助教授になっても、本官としての任官が20年に満たぬときには、その間の13年を加算して恩給を見てやる、だけど、それ以後20年になったら、認めるわけにいかぬ。それはそれでもいいけれども-----。

21年は京大の助手。文部教官だから3級だけど、助手の一番上ぐらい。この当時は、講師はなかった。

内海 助手にもランクがあるわけですか。

青盛 だから、初めてなったときの6級俸というのと、3級とで。だから、これ以後は、学長も助手も教官。あとの者は助教授、教授。そうすると、助教授、教授というものは先生だけれども、文部教官は事務官と学長と研究教官とに分かれておった。私が広大に来たときには、12年と21年の辞令で、大して差はなかったけれども、その後十何年たつ間に、同期生の羽白ぐらゐは月給が上が

ってきたけれども、ワシらの方はあまり上がらなかった。

二んなつまらぬことをいうておるけれども、ワシらが京都大学の経済学部の大学院で研究しておった時代には、和歌山高商に行っておる人が急に訪ねてきて、だれは月給が何級上がったとカネのことばかりいうて、研究のことを一つもいわぬ。世の中は変わったものじゃなというて、批評しておった時代がある。

内海 その大学院のときには、奨学資金はどうだったんですか。

青盛 奨学資金はもらわずに、大学院の3年間というものは、1年間100円ずつ授業料を出しておった。だけど、結婚してまで授業料を出すのは大変だから、このとき、4年目に大学院をやめますというて、助手だけにした。そのときに4年目になって、初めて大学院の授業料を免除するという意味のものはもらったけど、積極的な奨学資金というものはもらってない。

だけど、研究者の仲間では、高商に行ったりした連中が、口を開くと月給が何号俵で何ぼ上がったという勘定ばかりするから、あの人も変わったものだなというて、批評したことがある。のん気なものだね。

内海 アルバイトか何か-----。

青盛 根本的には家から送ってもらっていた。助手だけでやっていけぬわけでもないけど、京都女専やら——それは出来高払いで、講座料というものがないから。

内海 非常勤講師ですか。

青盛 非常勤講師だね。そういううちに、月給が多いわけじゃないけれども、「大谷大学の教授を命ず」みたいになる。奈良師範講師。

青盛 だから、やかましい集団論は出なかったけれども、地域集団とか、人口集団とかいうので、個人というものをシグマしたものじゃないということ。

古くは家族統計とか、そういうものがあつたけれども、最近では皆、核家族になってしまって、個人がばらばらになっている。親子とかそういう関係もばらばらになって、扶養をどうするかというときに、いまの年寄りは無理に扶養せぬでも、それぞれのものを持っておるからいいけれども、15歳以下の子供が少なくなるので、年寄りを養ったらいいいという議論は成り立たぬわけよ。年金やらいろんな計算が、人口統計と絡むし-----。

それから道徳統計という問題があることは知っておるんだけど、それがあらわれる形としては、人口動態とか、婚姻とか、自殺の問題とかいう社会関係において判断するわけよ。

だから、そういうことをいうたらなんだけれども、小さな親切というものは、個別の親切の問題と、悟りとしては、個人のモラルの確立が必要だ。ただ、社会のモラルとか、全部の社会の平和を守りましょうということはどうも具体性を欠くね。ただ、平和か戦争かという問題で、ある地域をサンプルにとって、北海道へソビエトが来るかもしれぬ。来たらどうするかというような仮説の問題でもまれたら、北海道の人ばかなわぬよ。

あんまり遠くのことはいわれぬけど、やっぱり近くの問題としては、府中市や五日市市が広島市に合併されることを望むとか独立して採算することを望むとか、時間の問題でもあるけれども。ですが、問題は、区ごとの行

政なり、統計集団の採択の単位を、あまり大きくしても困るわけね。あまり細分しても困る。選挙区については、いまの中選挙区という議論になったわけだ。

「天地はひろくはあれど 年老いて ひとりあそびをするところかも(清水比庵)」

これは比庵先生の一首です。確かに現在、老人問題も話題ではありますけれども、初心をたっとぶ老幼年齢層一体観のハンセン説との対応照応関係とも受け取られる境地です。

どこへ移住しても、人間至るところ青山ありということになれば、平生往生の出会いもいつ往生しても、これまで生きていてよかったという原爆生き残りの感懐にもつながります。

これが私の戦前からの人口統計研究が、こじし of センサス年まで生かされて、なお幾度かの国勢調査や、毎年の人口動態統計の発展を見、その解説を通じて、つくづく生きていてよかったとの望蜀の嘆きが、皆さんの統計上の知恵となって、生きて働くようになるのを希望しています。そして、統計情報のはんらんするただ中から、／つずつ、一番大事なことから解き始めてくることを願いたいものです。

古くから統計調査の要領として、少問多知であって、多問少知はまだ何とかなるにしても、要らざる質問をして、国民の口を閉じしてしまうことをおそれるものです。戦後の流行語の／つに「私は貝になりたい」といわれたのは、沈黙の時代ではあっても統計熱狂時代ではあり得ないと思います。

内海 どうもありがとうございました。



A表 都道府県別1ha当り水稻平均收穫量(kg)と各地域の統計生産数量(トン)  
(昭和55年)

No. 地名	万トン	Kg	作況指数	No. 地名	万トン	Kg	作況指数
1 北海道	59.42	385	81	25 滋賀	21.70	435	95
2 青森	19.56	265	47	26 京都	9.21	376	86
3 岩手	23.70	293	60	27 大阪	3.95	356	93
4 宮城	41.82	383	79	28 兵庫	23.11	374	89
5 秋田	62.52	547	99	29 奈良	6.49	396	94
6 山形	51.16	518	97	30 和歌山	5.17	458	99
7 福島	35.43	359	74	31 鳥取	7.61	364	78
8 茨城	42.59	435	98	32 島根	12.76	373	82
9 栃木	35.41	407	98	33 岡山	20.50	327	87
10 群馬	10.34	368	90	34 広島	16.47	389	84
11 埼玉	19.73	378	96	35 山口	15.47	384	82
12 千葉	34.71	487	97	36 徳島	6.66	362	91
13 東京	2.50	384	97	37 香川	9.64	335	91
14 神奈川	20.10	365	95	38 愛媛	9.88	386	85
15 新潟	75.21	489	98	39 高知	7.38	390	94
16 富山	25.70	488	93	40 福岡	27.21	418	85
17 石川	15.57	427	88	41 佐賀	17.30	419	85
18 福井	17.22	446	92	42 長崎	8.36	362	81
19 山梨	3.36	393	91	43 熊本	26.45	430	90
20 長野	26.23	484	91	44 大分	13.82	357	91
21 岐阜	16.80	401	98	45 宮崎	12.52	444	96
22 静岡	11.01	417	97	46 鹿児島	16.08	399	100
23 愛知	20.68	423	97	47 沖縄	2.81	255	96
24 三重	19.22	405	94	全国総数	969.20	412.	87

摘要 (1) 昭和55年産水稻収穫量(トン)。

(2) 作況指数は平年100の指数。

(3) 1ha当り平均は作付面積より計算。

なお相関表の府県名に○2かこ入るのは地域数である。

- ② 千葉には長野, 福岡には熊本, 山梨には東京, 岡山には長崎, 青森には沖縄を含む数。
- ③ 富山には福井 滋賀, 群馬には鳥取 徳島を含む数。
- ⑤ 京都には島根 愛媛 高知 大分を含む数。
- ⑥ 石川には岐阜 静岡 愛知 三重 佐賀を含む数。
- ⑦ 埼玉には神奈川 兵庫 奈良 広島 山口 鹿児島  
に, 単独の地域名は該当地域の数は①である。

B 表 作泡指数

級中点	度数	累積度数	C.M. 級中点	$f(x)$ 度数	Cum. $f(x)$ 累積的度数
100	4	47	535	1	47
97	12	43	505	2	46
94	4	31	475	2	44
91	9	27	445	5	42
88	3	18	415	10	37
85	4	15	385	16	27
82	5	11	355	7	11
79	3	6	325	1	4
76	0		295	1	
73	1	3	265	2	
70	0				
60	1	2			
47	1	1			
計	47			47	

C表 都道府県別水稻収穫量(昭和55年確定 ton) 1ha当り収量(kg)

Y \ X	0	50	100	150	200	250	300	350	400	450	500	550	600	650	700	750	800	850	900	f x
550 kg													秋田							1
520										山形									新潟	2
490																				2
460						千葉②														5
430				富山③	宮崎															10
400		和歌山	石川⑥	福岡②	茨城															16
370	山梨②	京都⑤	埼玉⑦						栃木											7
340	大阪	群馬③	岡山②	福島	宮城									北海道						1
310		香川																		1
280						岩手														2
250	青森②																			47
f(y)	5	10	18	7	3	1	1	1	0	1										